

第一回「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像
「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像

国際協力の専門的人材育成を目指す先進的
教育プログラム(通称:ザンビア・プログラム)の成果と課題
~「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像~

主催: 広島大学大学院国際協力研究科(IDEC)
共催: 広島大学、(独)国際協力機構(JICA)、ザンビア共和国大使館
後援: 文部科学省

開催報告書



平成 21(2009)年 12 月 13 日(日)
キャンパス・イノベーションセンター東京 5 階

平成二十一年(2009)年十二月

プログラム

13:30-13:45 ご挨拶

ザンビア共和国 中央州 事務次官 Mr. Denny Lumbama
文部科学省 大臣官房 国際課国際協力政策室長 浅井 孝司 様
国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊事務局 副局長 武下 悌治 様

13:45-14:00 ザンビア・プログラム概要説明

広島大学 大学院国際協力研究科長 池田 秀雄

14:00-15:00 成果報告 (発表 15 分、質疑応答 5 分)

算数 (活動、研究、学んだこと)
発表者: 澁谷 渚 2005 年から 2 年間派遣 (17 年度 2 次隊ザンビア理数科教師)

理科 (活動、研究、学んだこと)
発表者: 松原 憲治 2002 年から 2 年間派遣 (14 年度 2 次隊ザンビア理数科教師)

プログラム
発表者: 馬場 卓也 広島大学 大学院国際協力研究科 准教授

15:00-15:20 休憩

15:20-17:00 シンポジウム

シンポジスト

修了生: 木根 主税
IDEC 博士課程後期在籍、鹿児島女子短期大学講師

教員: 清水 欽也
広島大学 大学院国際協力研究科 准教授

JICA 職員: 菅原 美奈子
人間開発部基礎教育グループ 基礎教育第二課 調査役 (ザンビア技術協力プロジェクト担当)

外部有識者: 久保田 賢一
関西大学総合情報学部 総合情報学科 教授

司会: 馬場 卓也
広島大学 大学院国際協力研究科 准教授

※ プログラム終了後進路相談会を開催します。進路について、質疑応答で聞けなかったことのご質問など、ぜひご参加ください。

巻 頭 言

広島大学 大学院国際協力研究科 教授・研究科長 池田 秀雄

国際協力機構（JICA）による国際教育協力は 1990 年代のフィリピン初中等理数科強化プロジェクトに始まる。プロジェクト本体に加え青年海外協力隊（JOCV）との連携も当初から考えられていた。しかし相互に情報交換を行う程度であり密接なものではなかった。1998 年にはケニアにおいて中等理数科強化プロジェクトが開始され、ここでも JOCV のグループ派遣が実施された。ケニアプロジェクト開始当初は、長期専門家のリクルートで課題があったが、若手 JOCV 経験者を公募によって募集するようになって、プロジェクトと JOCV との連携が深まった。

しかし JOCV の目的は、日本の若者の国際経験を深め、国際協力に参加することとされ、組織的な枠組みはあまり重視されていない。一方プロジェクトは明確な援助枠組みで実施され、両者の連携はもともと困難であった。

このような状況の下で、広島大学大学院国際協力研究科（IDEC）は、JICA と連携して、国際開発協力の最前線で通用する高度な理論と実務能力を兼ね備えた人材を養成する目的で博士課程前期における特別プログラムを設け、学生を青年海外協力隊理数科教師としてアフリカのザンビアに派遣し、海外実地研修・研究を行ってきた。

前期課程一年次前期に IDEC において大学院専門教育を集中的に行い、二年間ザンビアに通常の協力隊員と同じ資格・待遇で派遣される。現地では初等学校第 8・9 学年（中学校レベル）の理科または数学教員として教壇に立つ（フィールドワーク）とともに、教員研修センターにおいて教員研修実務を支援（インターンシップ）する。毎年一回（8 月）現地に IDEC 教員が出向き、集中講義を行う他、電子メール等を利用して定期的に活動報告を行い、指導教員の研究指導を受ける。任務終了後、3 年次後期に帰国し、半年または一年間かけて修士論文をまとめる。

アフリカの国々の多くは、1960 年代に植民地支配から脱して独立し、1980 年代まではその歩みは遅くとも、徐々に発展しつつあった。ところが 1990 年代になって冷戦構造の崩壊以後ザンビアでは、経済の崩壊、政権争い、不正・汚職疑惑などが起こり、最近になってやっと政局が安定してきた。重債務貧困国

からの脱出を目指し、基礎教育を重視して教育改革を行いつつある。教育制度としては、9年制の初中等学校を新たに設置して完全無償化を図りつつある。しかし、従来の7年制初等学校の上に、新たに接続された第8・9学年の部分が最も問題が大きく、教育現場に対する直接支援や現職教員の再研修が急がれ、この部分の強化を目指して本特別プログラムを企画した。

すでに12名は本プログラムを修了し、現在、1名が帰国後論文執筆中、7名が現地活動中である（平成22年2月現在）。現地の厳しい状況（人的・物的資源の枯渇）に適応しながら苦勞しており、教える順序を変更したり教材を開発したり、理科では実験器具の不足を補うために簡易実験を試み、数学では基礎計算力を付けさせるための工夫など各自の課題意識を持って活発に活動している。この様な現地におけるフィールドワークを通して、高度な実践力を身に付けるとともに、表面に現れる多くの問題点についてその原因を実証的に分析する研究手法の確立を目指してきた。

本プログラムの準備段階から現在に至るまで、学校の選定、住居手配、安全確保、などで現地 JICA 事務所の全面的支援を受けた。また、ザンビア大学からの現地支援を受け、ザンビア大学で2回のシンポジウムを行うなど連携も図られた。

このたび、JICA と共催、文部科学省の後援を受け、成果報告&シンポジウムを開催することになった。当日は、これまでの8年にわたる取り組みを共有し、課題を提起した上で将来的によりよいプログラムに改善するために活発な議論が交わされた。この小冊子はその記録として編纂したものである。今後もプログラムは継続するので新たな汗を流して、大学と援助機関が連携した国際協力モデル活動の形成を目指したい。

最後に、今日までご支援を頂き、報告会に参加頂いた文科省、JICA 本部、JICA 協力隊事務局、歴代現地事務所関係者に厚くお礼申し上げます。

目 次

巻頭言	i
ごあいさつ等	iv
自己紹介	x
第一部 成果報告会	1
算数 澁谷渚	1
理科 松原憲治	3
プログラム 馬場卓也	6
質疑応答	9
第二部 シンポジウム	11
シンポジウムの様子	11
シンポジウムを終えて 馬場卓也	37
第三部 参考資料	39
ポスター	39
アンケート結果	41
派遣実績等	44
プログラム広報	47

ザンビア共和国 大統領府中央州付事務次官（県知事）
Mr. Denny Lumbama スピーチ

文部科学省
JICA ならびに広島大学の関係各位
ご来場の皆様

この度、ザンビア政府・教育省に対し本公開フォーラムへのご招待をいただきまして誠に
光栄です。本フォーラムは青年海外協力隊活動の我が国への功績を垣間見る機会でありま
す。このような機会の証人として、教育省 教員教育・特別サービス局長、教育省 教育
基準・カリキュラム局長も同行しています。

我が国政府は多岐分野にわたり日本と長期的に良好な関係であります。1960 年代より政府
開発援助（ODA）の技術協力プログラムを通じて、学校建設、医療サービス、持続的な農
業開発、水環境・公衆衛生、また道路建設において日本の援助を受けています。

学校という点では建物の建設に留まらず、JICA によって青年海外協力隊が派遣されてきて
います。多くの隊員は理数科授業を担うため学校やカレッジに派遣されます。

理数科の指導におけるパートナーシップの強さは、一昔前の協力隊員が単にクラスで授業
を受け持つことに留まっていた時から、今やレッスン・スタディーの実施を支援するとい
うふうに拡大しています。

隊員の方々による生徒の学習達成度や授業の実施、教材開発への貢献は意義あるものです。
これらは配属先で同僚ザンビア人教師に共有されつつあります。

SMASTE 授業研究支援（JICA 技術協力プロジェクト）が開始されてからは、隊員の皆さんが
ファシリテーターとして様々なレベルで活動されてきており、よってザンビア授業研
究の成功に寄与していただいています。

さらには、協力隊がザンビアで主要な役割を果たしてきている 2 つの取組みがあります。
第一に、学校のクラブ活動で JETS（Junior Engineers, Technicians and Scientists）とい
う若い科学者養成の取り組みへの積極的な参加です。JETS は学校レベルでクラブ活動とし
て生徒が理科・数学の活動を重視した取り組みで、創造性やイノベーションを高めます。
自由研究などの発表を行う州レベル、国レベルの大会も年に一度行っています。第二に、
ザンビアの教師がメンバーであるザンビア数学教育協会（ZAME）とザンビア理科教育協
会（ZASE）への協力です。理数科目は多くの生徒が苦手としているものです。

皆様ご承知かもしれませんが、ザンビアのある地域には決まった季節にしか訪れることが
できない、とても険しい山地があります。隊員の方々はその地でも熱心に活動されて

います。全国から教育省に届く報告は、隊員の皆さんが活動に貢献する様子を賞賛するものです。私達は、何とかして生徒に向学心というやる気を起こさせようと指導方法について努力している隊員の姿も知っています。我が国に対する彼らの献身的な貢献に感謝いたします。これは平和と協調性ある生き方ができる、バランスのとれた世界をつくるための一つの方法です。

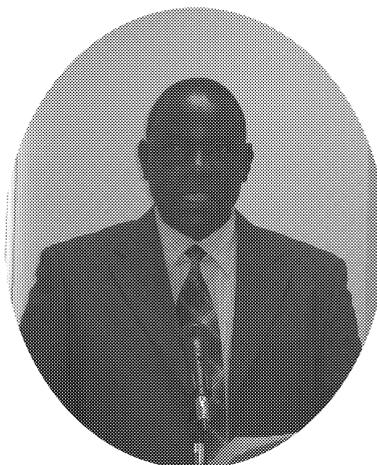
ザンビア派遣青年海外協力隊の皆さんが行った研究の成果発表の場であるこのフォーラムに参加できることを喜ばしく思います。報告によってザンビアが国家として成果をおさめた部分と、引き続き改善の余地がある部分とが示されればと思います。我が国開発分野に対するすべての日本の援助と協力に感謝申し上げますが、(協力隊事業のように)日本人派遣スキームを伴うプログラムには格別の謝意を表します。なぜならば、人々は経験や知識の共有にとどまらず、文化や心も分かち合う事ができるからです。

最後にザンビア政府を代表し、JICA と広島大学を通して我が国における協力隊の活動を後押しいただいている日本政府に御礼申し上げます。

我が国国家として、このような **home grown** (我が国で培われた) 研究を教育の質の更なる向上にどのように生かすことができるか戦略立てが出来るよう、研究成果が我が国にも共有されることを大いに期待しております。

開発途上国としてザンビアは多くの支援が必要です。今日見聞するような協力活動がこの先何年も進展することが我々の願いです。

以上



ザンビア・プログラムの成果と課題シンポジウムにおけるあいさつ

文部科学省を代表して一言ごあいさつを申し上げます。

我が国の政府開発援助については、近年経済的な事情もあり、減少傾向にありますが、その内容において人材養成に重点が置かれるとともに、質の向上を目指しているところであると認識しています。また、同時に、国内の大学等で国際協力分野において活躍できる人材を育成することはこれまでも増して重要な課題となっています。

そのような状況において、我が国国内では「若者の内向き指向」という現象が起きています。海外に行く若者の数が減っており、国際協力に関心を有する若者の数も減ってきているのです。国内での研究体制が充実し、コミュニケーション・情報技術の発達により、疑似体験等による知識の習得が増えていることもその原因であると思います。しかしながら、「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように実体験は何よりも効果的な学習であり、身につく方法です。

このザンビア・プログラムは、正にその見本というべきものであると思います。実地経験に基づく教育研究は説得力があります。また、国際協力分野での活躍を目指す若い人々にとって、魅力的であり不可欠と言ってよいのではないのでしょうか。

こうした実践経験を取り入れた教育研究プログラムは広島大学が先駆となっていますが、国内において更に広がっていくことを期待しています。

また、これから育ってくる修了生たちの就職を考えますと国内での認知度を高めるとともに、特に企業関係者等の方々にご理解をいただき、是非優秀な若手人材が活躍できる場を与えていただきたいと思います。

本日は、これまでの成果発表を聞かせていただき、本プログラムの今後の発展をともに考えていきたいと思っております。

最後に、本日の会議をお世話いただいた広島大学関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます、私のあいさつとさせていただきます。

文部科学省 大臣官房
国際課国際協力政策室長
浅井 孝司

ザンビアプログラムに期待すること

「理数科教師としての協力隊活動」と「広島大学大学院修士課程学生としての研究活動」の両立が本プログラムの大きな特徴であり、また、本プログラムに参加したものに大きな付加？負荷？になっているものでもある。

任地での活動を視察し、任期を終了した隊員の報告を聞き、今回のシンポにも参加させて頂いた中では、「隊員活動」と「研究活動」は、参加した本人達の多大なる努力により、十分に両立し、具体的な成果もあがっていると言うことができると思う。特に、隊員という立場だけではなく、研究者という視点をもつことにより、ザンビアの教育現場で起こっていることを客観的に見ることができ、普段、触れている生徒・学校・教育現場の問題をアフリカ・ザンビアの教育の問題として捉えることができるようになるのだと思う。また、隊員達を受け入れた学校や教員研修センターにとっても若い外部者（教育・研究者）としての斬新な指摘・刺激を受けたと思う。（「現場にあるもの、起こっていることを題材として研究ができること」の気づきのように）但し、隊員達が、現場で見て、聞いて、感じて、考えたことが、隊員活動の時間的制約や、自分の知識や経験不足により未消化に終わっているものが多いとも思う。

また、本プログラムに係るものとして、多くの課題も見えてきているように思う。現地リソース（UNZA 教育学部や現地教員）を活用し、派遣されている隊員を支援することや、ザンビア教員との協働を進めること、我が国の協力（JICA理数科教育プロジェクトや他の理数科隊員や教師会）との連携・協働を進めることなどは、すでに着手されていることだが、より積極的にかつ実践的に深化させる必要があると思う。将来的には、本プログラムで得た知見や成果を、ザンビア教育分野での研究として体系化し、他のドナーに向けてもその発信をしなくてはならないし、アフリカの教育現場で得た知見が、どのように日本の教育現場で活用できるかについても考えていって欲しい。（夢はどんどん広がるばかり）。「隊員達の斬新な視点・気づきを生かし、色々なことを試行・実践しながら、体系化し、発信する」ことを今後も、継続・継承していって欲しい。

特に、本プログラムで育った人材が、国際協力や教育、またはそれぞれの目指した道で、より深く・幅のある経験を積み、それをアフリカや色々な国々の人々と熱心に議論しながら成長し、我が国の教育分野をリードしていける人材として育っていくことを大いに願っています。

最後になりましたが、池田先生や馬場先生を始め、本プログラムを推進して頂いている広島大学大学院国際研究科の皆様、そして本プログラムに参加した隊員OV、そして今、参加している隊員の皆様のご努力に深く感謝し、益々のご活躍を期待したいと思います。

2010年 1月8日

JICA 総務部（元JICAザンビア事務所長） 乾 英二

今後への期待

私が普段、青年海外協力隊事務局ザンビア担当として接している連携プログラムについて、シンポジウムでは活動報告のみならず、新旧の担当者からも積極的な意見・コメントが出て、多くの方の様々な思いが積み重なって今があるということを再認識する機会となりました。そして今後への期待ですが、理数科教師隊員の中には、現場経験の豊富な人から教師経験のない人まで幅広くいます。これまでは現職教員の方などにリーダーシップを取ってもらい、経験の足りない隊員を引っ張ってもらうことなどを期待していました。その一方で、連携プログラムの隊員は、現職教員とはまた違った分野で他隊員を引っ張ってリーダーシップを取ることが出来るのではないかと期待しています。連携プログラム隊員には、個人の知識・技術だけでなく、これまでの連携プログラム隊員のノウハウをぜひ吸収していただき、派遣中の他のボランティアに向けて、影響力・刺激を与えてほしいと思っています。

JICA 青年海外協力隊事務局 アフリカ・中東課 ザンビア担当職員 狩野 剛

今回、同プログラムにかかる成果報告会及びシンポジウムが、このように大々的に実施されたことは、僅かながらにも同プログラム実施の一端を担えたことにとっても大きな喜びを感じています。特にザンビアの現場で当初は途上国での生活すら間々ならなかった(?)同プログラム参加隊員が、日々の活動の中から問題点を発掘し、最後には協力隊活動と平行して論文も纏め上げる姿には頼もしさを感じていました。

同プログラムは青年海外協力隊事業と連携することでより「現場」に近いところでの調査・研究が多いと感じています。この特色を生かして、同プログラムで研究されたことが、「現場」に一番近いザンビアの教員により実践され「現場」から変化が始まるようなアプローチができると青年海外協力隊事業との連携の特色が生かされるような気がします。ザンビアそしてアフリカにおける日本の理数科教育への技術協力は引き続き多くの国で求められています。同プログラム卒業生が日本の技術協力の分野で活躍することを切に願っています。

彦根克己

(元 JICA ザンビア事務所 ボランティア調整員)

ご挨拶・発表者等のご紹介（敬称略）

ザンビアから

1) Denny Lumbama(Mr.), PS - Central Province

大統領府中央州付事務次官（県知事に相当）

2) Ruth M. Mubanga(Mrs.), Director - Education & Specialised Services

教育省 教員教育・特別サービス局長

3) Florence C. Mfula(Mrs.), Director - Standards & Curriculum

教育省 教育基準・カリキュラム局長



浅井孝司（あさいたかし）

文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長

1982年旧文部省に入省し、1999年文部省学術国際局国際学術課学術交流官を経て、2001年文部科学省国際統括官補佐としてユネスコの活動に従事。2006年、一等書記官として在バングラデシュ日本大使館で勤務。2008年8月から現職。国際協カイニシアティブ等大学における国際協力など、文部科学省のODA事業の総括を行っている。



武下 悌治（たけした ていじ）

JICA 青年海外協力隊事務局 副局長

青年海外協力隊事務局シニア海外ボランティア課長、国内事業部管理課長、

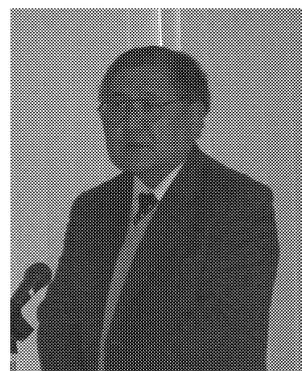
フィジー事務所長等を歴任され現在に至る。



池田 秀雄（いけだ ひでお）（専門：理科教育）

広島大学大学院国際協力研究科 教授・研究科長（専門：理科教育）

もともと生物教育が専門だが、国際協力分野でケニア、フィリピン、バングラデシュ等での理数科教育改善活動に従事。ザンビア・プログラムの責任者を務め、「大学院生の海外ボランティア活動としてのザンビア派遣とその組織化に関する実証的研究」など、国際協力分野における人材育成モデル研究にも従事。



発表者（算数）

澁谷 渚（しぶや なぎさ）（研究分野：数学教育）

広島大学大学院国際協力研究科博士課程後期2年在籍、日本学術振興会特別研究員

数学教師を目指し、日本の私立高校数学を指導するなどしていたが、イギリス留学を機に海外に目が向く。大学の先輩だった木根氏の紹介でザンビア・プログラムを知り参加。2005年11月から2年間ザンビア・プログラムで派遣。修了後、博士課程に進学。2008年と2009年にもそれぞれ青年海外協力隊（プログラム・オフィサー）



としてザンビアへ派遣。ザンビアのベーシックスクールにおける数学の授業改善を現地の教師達と行う中で研究している。将来、子供の文化性という視角を通して数学教育やもっと大卒の学校教育を眺めて議論したいと考えている。

発表者（理科）

松原 憲治（まつばら けんじ）

国立教育政策研究所 教育課程研究センター基礎研究部 研究員（専門：科学教育）

もとは理学部卒業だが、1998年にニュージーランドで中等教育教員養成課程を修了し、教育分野を志す。1999年以降日本の中・高等学校の教員経験を経て2002年ザンビア・プログラムに参加（初代派遣）し、修了後は博士課程後期に進学。教員経験や途上国経験なども生かして、後期課程在学中ガーナのJICA教育協力プロジェクトに短期専門家として従事。2009年4月から現職。研究のテーマは理科授業における実世界との関連および授業分析に関する基礎的研究。



成果報告&シンポジウム司会

馬場 卓也 (ばば たくや)

広島大学大学院国際協力研究科 准教授 (専門: 数学教育)
JICA プロジェクト「バングラデシュ小学校理数科教育強化計画」
を国立大学法人として初めて受託した (パデコ社と共同)。バングラデシュ、ザンビアなどで国際協力実践に参画するとともに、各国の学校教育の取り組みを教科教育の視点から分析。国際協力実践と理論研究の統合・発展、そして教室の中から発想する教育開発研究を目指している。



シンポジスト (修了生)

木根 主税 (きのね ちから)

鹿児島女子短期大学 児童教育学科 講師 (専門: 算数教育)
2000 年から 2 年間、青年海外協力隊 (ドミニカ理数科教師) 派遣中に教育分野に対する長期的視野に立った国際協力の必要性を感じ、ザンビア・プログラムに関心を抱く。2003 年 IDEC へ入学し、ザンビア・プログラムに参加。修了後は博士課程後期へ進学。在学中、短期専門家 (算数・数学教育/校内研修) として JICA 教育協力プロジェクト (ガーナ、ミャンマーなど) に従事。パデコ社を経て 2009 年より現職。現在の研究テーマは、開発途上国の数学教師にむけた教育協力 (特に、教授・学習活動に対する途上国教師の省察に注目)。



シンポジスト (IDEC 教員)

清水 欽也 (しみず きんや)

広島大学大学院国際協力研究科 准教授 (専門: 理科教育)
2008 年に本学教育学研究科から異動して以降、バングラデシュやカンボジアの JICA 教育協力プロジェクトに短期専門家として従事。今年度のユネスコ・アペイド広島セミナー開催に向けても中心的な役割を担っている。ザンビア・プログラムでは、JICA による派遣を含めこれまで 2 回ほど現地入りし、学生指導、UNZA との関係構築等に従事。



シンポジスト

菅原 美奈子（すがわら みなこ）

JICA 人間開発部 基礎教育グループ 基礎教育第二課 調査役
1998 年旧国際協力事業団入団。2001 年から 2003 年までケニア、
アフガニスタンなどの教育プロジェクトに携わる。2004 年から
約 3 年間ミャンマー事務所勤務。教育や麻薬対策分野でのプロ
ジェクトの他、総務・経理などを担当。2007 年よりスタンフォ
ード大学へ留学し修士号（国際教育政策）を取得。2008 年 9 月
より現職、ザンビア教育協力プロジェクトを始めとする東南部
アフリカ地域の教育プロジェクトのほか、中米算数教育プロジェ
クトなどを担当している。

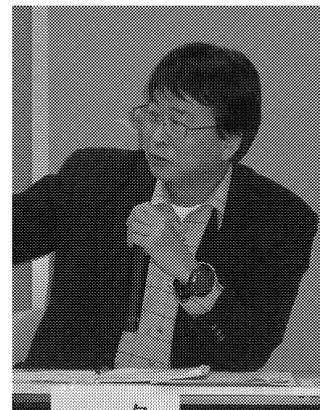


シンポジスト（外部有識者）

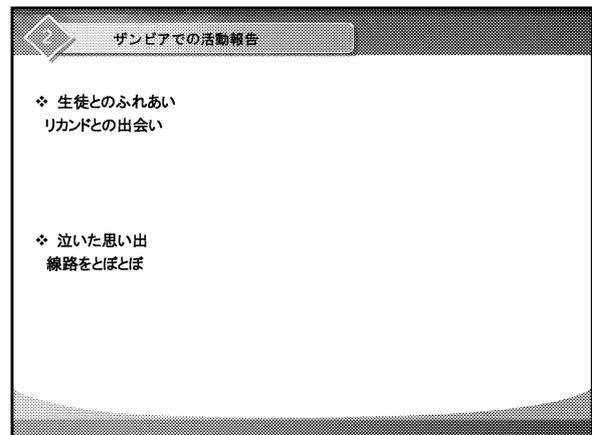
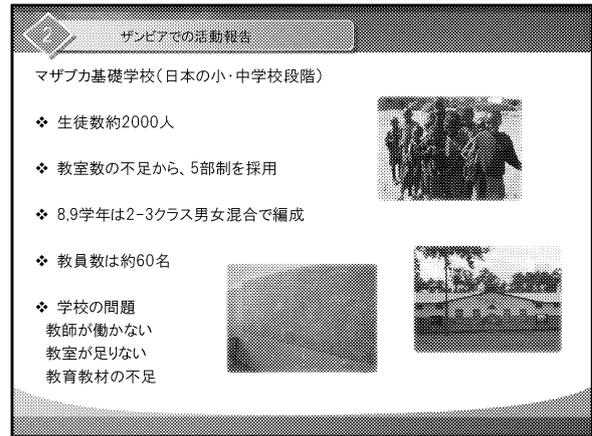
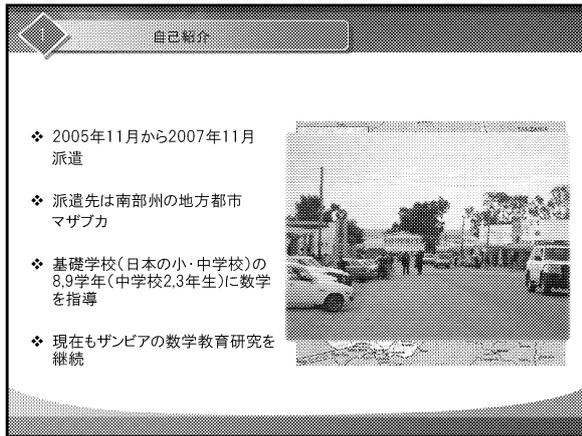
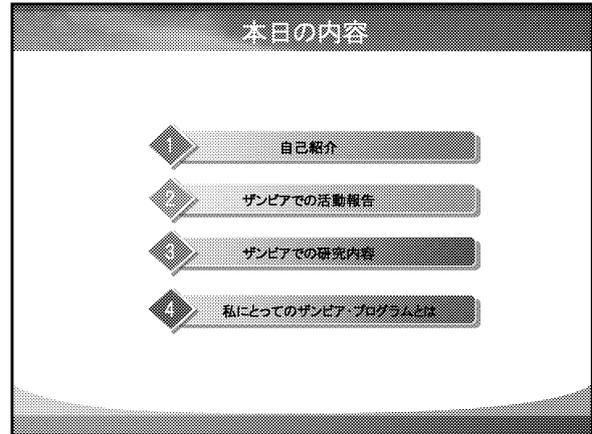
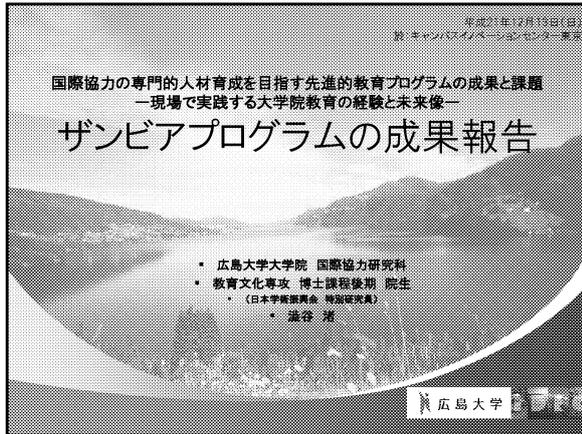
久保田 賢一（くぼた けんいち）

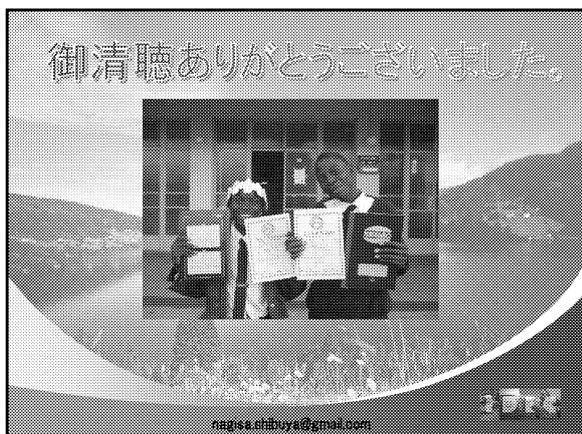
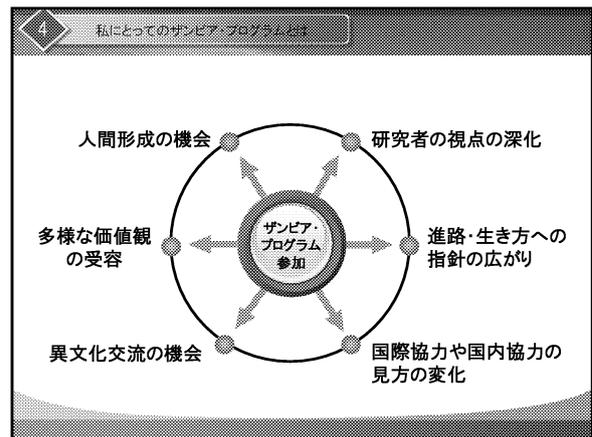
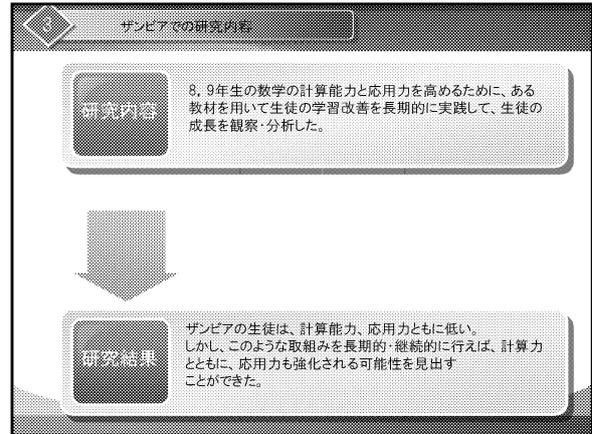
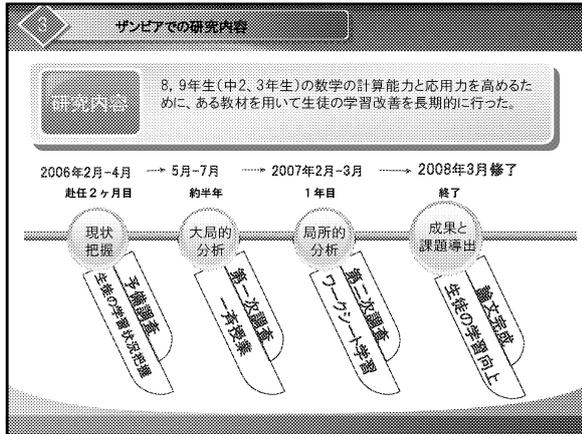
関西大学総合情報学部 総合情報学科 教授（専門：教育工学 /
開発コミュニケーション / 学習環境デザイン）

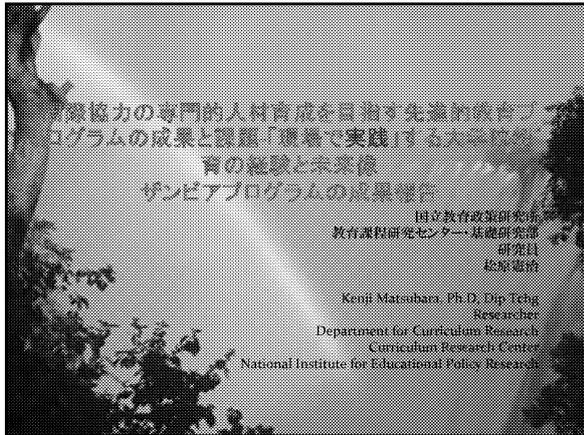
高校教員として勤務後、青年海外協力隊（フィリピン理数科教
師）に参加、アメリカ留学等を経て現在に至る。ミャンマー、
ボリビア、シリア等の国際教育協力実践に参画経験を有し、Meet
the GLOBE という、異文化理解促進のための青年海外協力隊員と
日本の小学校の交流を支援する活動なども担う。教育研究活動
では、これまで 10 名以上のゼミ生が協力隊員として世界に羽ば
たいている。国際協力に関する著書だけでも、「ライフワークとしての国際ボランティア」、
「開発コミュニケーション- 貧しい人々が主役となる開発へ向けて -」（いずれも単著）
など多数。



第一部
成果報告会







本日の発表内容

- 自己紹介と背景
- ザンビアでの活動報告
- ザンビアでの研究
- 私にとってのザンビアプログラムとは？

自己紹介

ザンビアプログラム参加前:
ニュージーランドで教員免許取得
日本における教員経験

派遣期間: 2002年12月から2004年12月

派遣先: 南部州地方都市のチョマ

活動内容: ①基礎学校の8,9学年 (中学校2,3年生)に理科を指導
②教員リソースセンターでの活動

南部州 チョマ

背景:

教育協力における課題とザンビアプログラム

国際教育協力(理科)での課題例
実験・観察の実施不足
教師中心の授業

↓

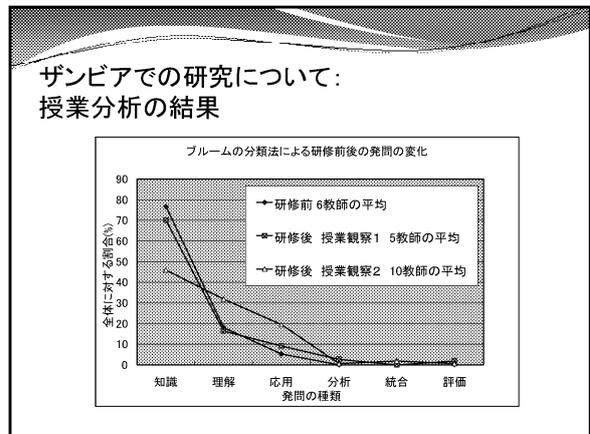
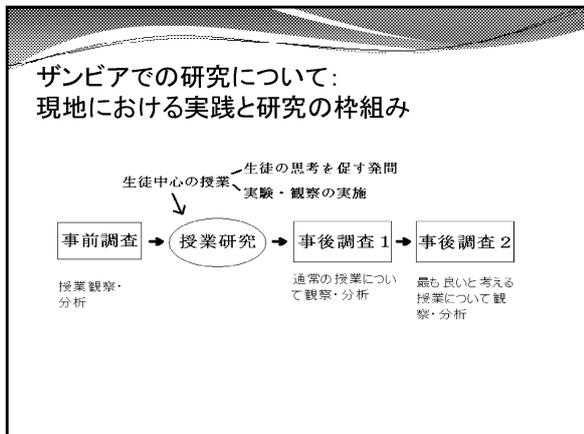
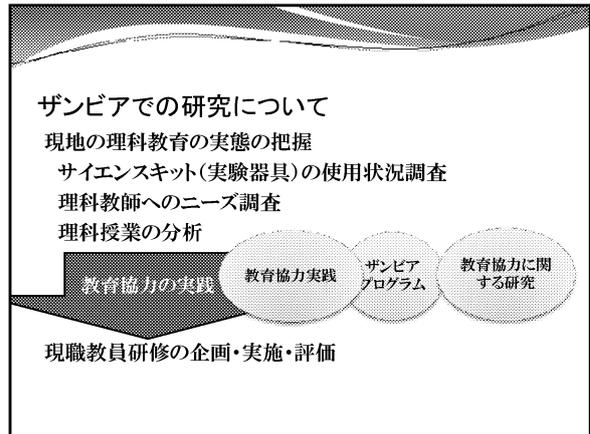
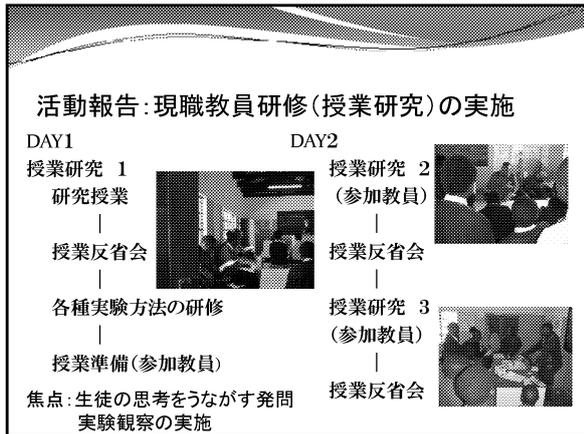
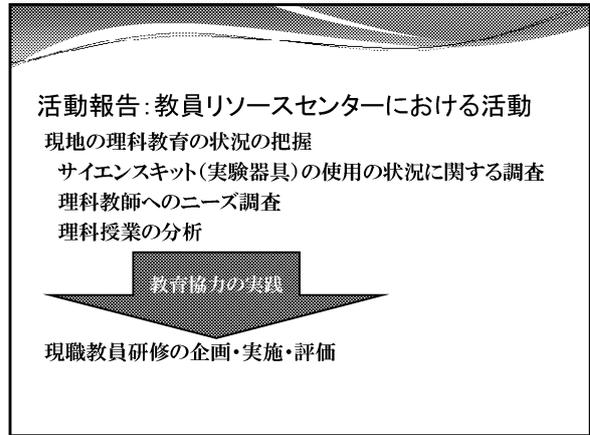
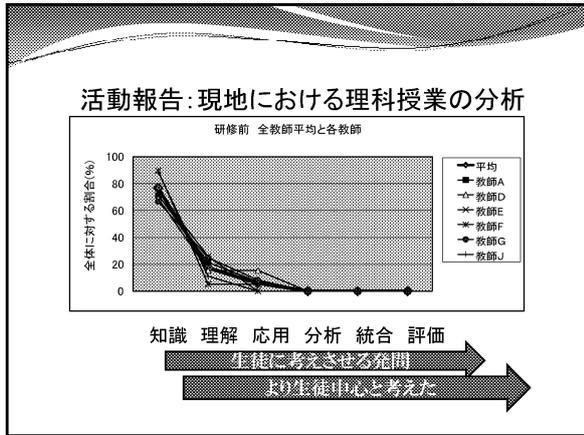
- 現職教員研修システム SPRINT
- 基礎学校の教員と教員リソースセンターの連携
- 教育現場の声を反映した研修

活動報告: 学校における正規の活動

- 教科担任
- クラス担任
- 受験対策
- サイエンスキットの活用
- 実験器具の開発

活動報告: 学校におけるボランティア活動

実験室の建設(外務省 草の根・人間の安全保障無償資金協力の利用)
案件名: セントバトリクス地域小学校実験室建設計画



私にとってザンビアプログラムとは？

- 実践家・研究者としてのスタンスの構築(実践から学び、実践に返す)
- 視野の拡大
- 現場における実践と研究から得た課題意識
授業の分析方法の改善
分析方法の開発の方法の改善・・・現地教育関係者の意見
→ 博士論文研究へ



私にとってザンビアプログラムとは？

ザンビア協力隊事務所における帰国直前の活動報告会(2004年11月)より

- 教育現場末端で生の教師経験
- ザンビア人のやさしさ
- フィールドでの研究活動
- 教室型とRC型
- メリット・・・視野、客観性、問題意識の維持
- デメリット・・・学費と時間、どちらつかずの危険
- 総合的には・・・充実した隊員活動

ザンビアプログラムの課題

- 大学側・・・研究に関するサポート体制の更なる強化
- 現地
JICA・JOCV・・・ボランティアとしての自由度の確保
- プログラム参加者(学生)・・・むらのない教育実践と研究

ご清聴ありがとうございました。



ザンビアプログラム 成果

広島大学
馬場卓也

IDEC-JOCV連携評価報告および今後の課題について（青年
海外協力隊事務局、2008年10月31日より抜粋）

ボランティア事業への影響

- ①募集・広報：積極的な広報活動により、関心者層拡大。
- ②隊員リクルート：充足率の低い理数科教師の安定的な派遣。
- ③社会還元：理論と実践両方を身につけた高度な専門人材。

ザンビア教育セクターへの影響

- ①任地での日常活動。ザンビア側の評価は良好。
- ②SMASTEプロジェクトとの連携。

ザンビア理数科隊員への影響

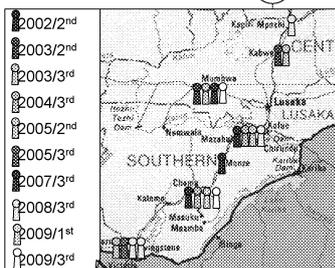
- ①教師会などの自主講座にて、授業手法や作成教材の共有、講義等を通じて、一般理数科教師隊員への貢献。

JICA事務所における評価

- ①安定した理数科教員の確保。
- ②活動の立ち上がり、教育事情への理解など。

派遣実績

2002/2nd
2003/2nd
2003/3rd
2004/3rd
2005/2nd
2005/3rd
2007/3rd
2008/3rd
2009/1st
2009/3rd



02(14)年度:3
03(15)年度:3
04(16)年度:2
05(17)年度:4
06(18)年度:0
07(19)年度:1
08(20)年度:4
09(21)年度:1
今年度派遣予定:2

修了:12(任短なし)
活動中:6
候補生:2
合計:20名

ザンビア地図出典：テキサス大学図書館

成果の概要

- 1. 制度的な成果
大学内派遣制度、JICA他国内関連機関との連携制度、ザンビア国関連機関との連携制度
- 2. 個人レベルの派遣中活動の直接的な成果
隊員としての活動(教授・研修他)、ザンビア教師会への貢献、修士論文
- 3. 個人レベルの中・長期的な成果(就職と将来的な成果)
就職先、就職後の活動他

1. 制度的な成果

- 標準教育期間は3年6ヶ月。協力隊参加前に行われる派遣前訓練と2年間の協力隊活動を含む。
- 単位取得については、協力隊参加期間に、インターンシップ、フィールドワーク(各2単位)、専門科目、演習(各4単位)の計12単位が取得可能。
- 数学教育開発論、理科教育開発論、国際カリキュラム開発論現地研究・演習など現地で必要な基礎的知識・技能のための講義を整備。
- 派遣中は、国内指導教員とは定期的にメールにて研究の相談・報告。またザンビア大学教員に現地チューター役の役割。
- 最低限の機材については日本より支援。

制度外の自発的な勉強会

プログラム初代隊員が発起人として始めた課外の勉強会。帰国隊員が中心となって集まり、ザンビアの教育事情、任地の活動などについて、派遣予定者に講義、また後者の疑問解決の場でもある。(前期講義期間中週2回、各回1.5時間程度)

大目標

ザンビアでの協力隊及び研究活動をより有意義なものにする。

小目標

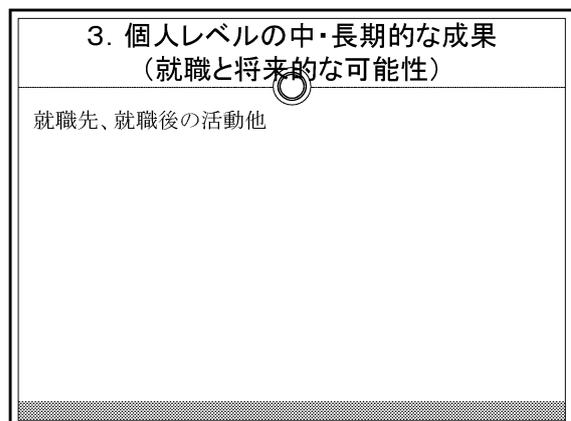
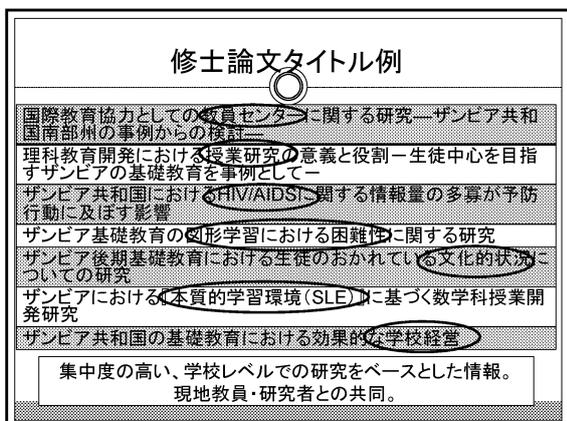
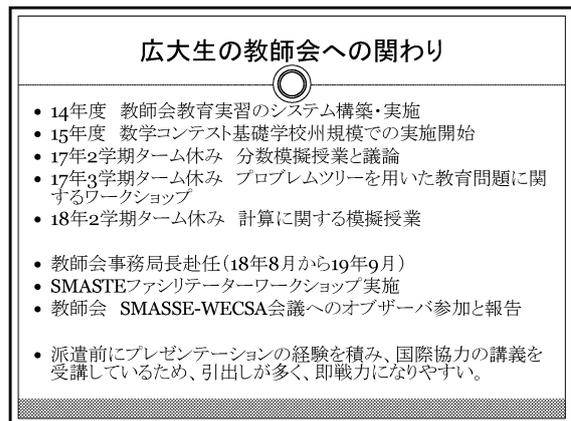
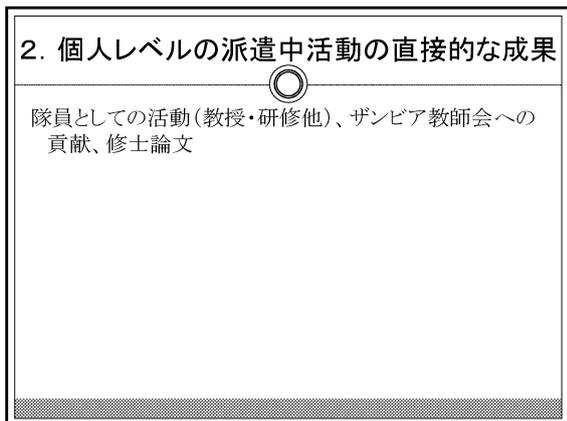
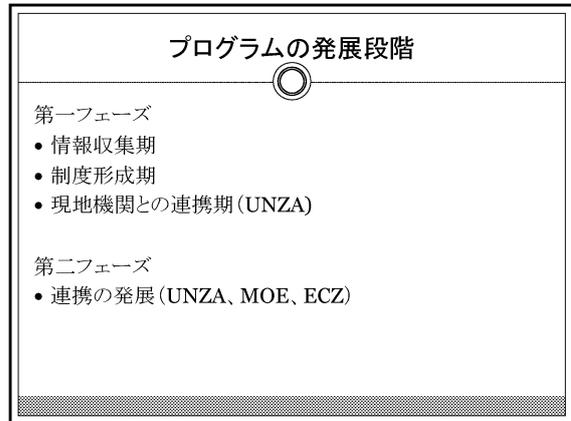
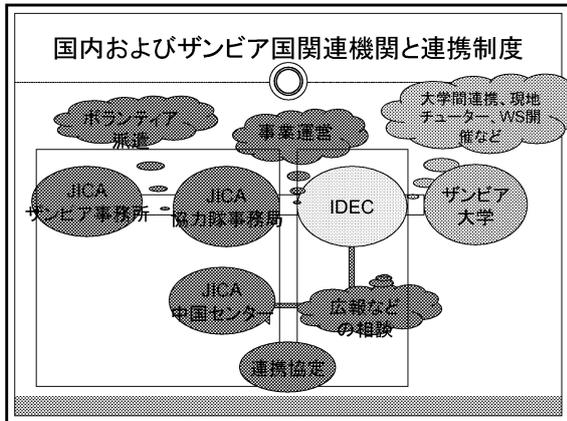
授業実践力の向上

ザンビアの教育事情の理解

活動現場(学校とRC、ザンビアJICA事務所)

の現状認識





就職先

職種	人数(12人中)
小・中・高等学校教員	5
研究など(教育分野)	4
国際協力関連(教育分野)	3
その他(民間企業)	2

(重複してカウント)

将来の可能性

人材育成という観点からは、大学院修了直後の就職先だけでは不十分である。多くの修了生はまだ若く発展途上で、転職や勤務先での仕事の変化など、将来の可能性は大きい。

・学校教員として国際理解教育などで活躍している場合、
・研究者・大学教員として国際協力に関わる場合
など

ただし彼らの活動の根底には、現地で2年間汗を流したザンビアプログラムでの経験が大きく存在しているだろう。

ザンビア・プログラム成果報告 & シンポジウム 成果報告会の部 質疑応答

発表者：松原憲治

Q：関西大学の久保田です。質問なんですけども、最後のところで、ボランティアとしての自由があまりなかったというような箇所があったのですが、どのようなところが。

A：私自身は自由があったんですけども、これからも確保していかないといけないな、と。自由があり続けるといいなという希望でございます。

Q：具体的にどんなことが。

A：そうですね、具体的な、よく他の地域でありますのは、プロジェクトがあった場合ですね。そのプロジェクトから授業をモニタリングするであったり、教材を作ってください、ということで指示が出たり。それをよしとして、勉強になると思い参加したりするのはいいと思いますが、経験になりますので。それに関しては緩やかな連携ということが必要なのかなと思っています。

Q：本日は貴重な報告をありがとうございました。私は平成 17 年度 1 次隊でベナンに派遣された飯島と申します。最初のところで、課題として実験観察の実施に向けていくというのがありまして、教員中心の指導については報告の通りたくさん言われたと思うんですが、その中でもサイエンスキットというのが何度も出てきたと思うのですが、コイルのようなものが入っていると。よくわからなかったんですけども、それを教えていただきたいのと、それがセットで配布されているものなのか、あるいは教師用のものなのか、また生徒への配布、一人ひとり使うことができるのか、結果どれ位活用されていたのか、ということが質問です。

A：質問ありがとうございました。サイエンスキットにつきましては、中身はバージョンにもよりますが、大体 80 種類前後入っておりまして、活用次第では教科書に載っている実験を実施することは可能です。ただし、気体の発生、二酸化炭素の発生などはできませんので、それらは現場の先生で工夫して作っていく必要がございます。

配布率につきましては、ザンビア教育省から配布されておりますが、80～90 %以上の学校には配布されているようでした。それは 2003 年時点で私たちが教育リソースセンターで行った調査の結果です。基本的にほぼすべての学校に配布されていると考えておりました。

これは学校に対する実験器具でしたので、日本のように生徒実験は想定しておりませんでした。実施状況ですが、具体的にどれくらい実施されているのかというのを南部州で調査しましたら、あまり良くない状況でした。中央州等ではサイエンスキットの使用の仕方の研修が行われたようでして、こちらの方は実施率が高いのかなと想像しておりました。

発表者：馬場卓也

Q：千葉大学の山口と申しますけれども、ザンビアにいつている、派遣している学生とのコミュニケーションは主にメールで、ということだったんですけども、派遣先には教員の方は行かれることはあったんでしょうか。行かなければいけなかったんでしょうか。

もう 2 つ。専門科目が 4 単位とれるということなんですけれども、メールでそれはおやりなのでしょうか。それから、このプログラムを支援する学内の体制は、人員などはどんなふうになっているのでしょうか。

A：すみません、最後は学内の、ということでしょうか。

Q：はい学内です。

A：ありがとうございます。お答えしたいと思います。

まずは派遣先への教員の派遣ですけれども、これは、このプログラムを立ち上げた時に JICA、特に青年海外協力隊と我々との間で協定がありまして、巡回指導という名前だったと思うんですけども、年に 1 回教員が行きまして、向こう側で集中講義という形で講義を行っております。

専門科目ということでしたけど、ここにある科目に関しましては、彼らが 4 月に入学、7 月までの前期の期間でこのあたりの科目を取り、卒業に必要な単位は 30 単位なんですけど、平均すると 20 数単位程度は大抵派遣前に取っています。ここに書かれているのはそのような単位です。ただ、派遣中にゼミである演習なんかはメールを通しつつやりますし、インターンシップとかフィールドワークという別途設けた単位もありますので、そのあたりで残りの単位を行っている間に得ています。

学内の体制ですけれども、今日います、研究科長が生物教育で、後ほど登壇していただきます、清水准教授は物理、理科教育全般を見ておられ、私は数学で、この 3 人がコアになっております。IDEC の中に作業部会を設けておりますので、必要でしたらそちらの方にかけますけれども、初期の頃はそういう形で部会でやることも必要だったんですけど、今は日々動かしていくことが中心ですので、我々レベルで対応しているというのがほとんどだと思います。

よろしいでしょうか。

Q：はい。

第二部
シンポジウム

ザンビア・プログラム成果報告&シンポジウム シンポジウムの部

司会 (馬場)

先ほどプログラムの成果を発表した馬場が司会をしたいと思います。

このタイトル自体非常に長いんですが、「国際協力の専門的人材育成を目指す先進的教育プログラム」これがザンビア・プログラム、私たちがザンプロとよんでいるんですけども、その正式な名称です。現場で実践、先ほども実践という言葉が何度か出てきましたし、JICA の緒方理事長がよく取り上げられる現場主義ということも関係するのかなと思うんですけども、「現場で実践する大学院教育の経験と未来像」というのを副題として挙げております。その可能性について本日は4名の方に議論していただきたいと思っております。

ただ、この場にもかなりいろんな関係者の方というか、このプログラムに関わって来てくださった方もおられるみたいなので、できる限り時間をこれらの方とシェアしたいと思いますが、まずは今日のシンポジストのご紹介をさせていただきたいと思います。まずはザンビア・プログラム修了生で木根主税さん。参加者、ザンビア・プログラムで参加した立場からお話いただく予定です。次にザンビア・プログラム実施者として、現在我々とともに、これを実施している立場で、広島大学清水准教授、三番目でザンビア・プログラム共同実施者ということで、このプログラムというのは私たち大学だけではもちろん実施できないわけで、プログラムを共同で実施してきております、共同でやってきております国際協力機構から、本日は人間開発部審査役の菅原様に来ていただいております。また、こういうシンポジウムをやる場合に、外側からの視点で見ていただくということをよくやるわけなんですけども、本日は外部有識者として、関西大学久保田先生にお越しいただいております。ところで、先生はご自身も青年海外協力隊の経験がおありなんですけれども、またかなり多くの学生を青年海外協力隊として送るといった教育活動にもかかわっておられますので、こういう私たちが取り組んでいるプログラムに辛口の、いろんな形でのご批評とかコメントをいただければというふうに思っております。

私の中で考えているのは大きくは2点です。成果、これまで何をやってきたのか、それのある種のまとめ。と、今後何をすべきなのか。このシンポジウムというんですか、この全体を成果報告会と最初呼んだんですけども、成果報告会というと、前者に力点があるようなんですけども、どちらかというとも未来形で語りたいたいと思っております。もちろん、何とか夢物語だけを語っていいわけじゃないんだとおもうんですけど、少し夢を見たいな、というんでしょうか。今までやってきたことを踏まえながら、こういうこともできるんじゃないか、こういうことやってきたんだったら、もう一步踏み込むことによって、さらにこういう広がりを持つことができるんじゃないか、という方向に向かいたいたいと思っておりますので。

まずはシンポジストの方に、簡単にこれまでのまとめ、もしくは自分のご意見を言って

いただきたいと思います。こちらから順にお願いします。

木根

では失礼します。こんにちは。私はザンビア・プログラムの第 2 期生ということで、平成 15 年度 2 次隊でザンビアの中央州カブエという町に行きました、木根といいます。よろしくお願いします。で、今日はシンポジウムの中でザンビア・プログラムの修了生の立場ということで意見をいうということで今ここにいる訳ですけども、修了生にとってというのはザンビア・プログラムという話は先ほど松原さんや澁谷さんの方からかなり話があったと思ひまして、自分としても共通する部分が多々あったなと感じていました。ただ二人が話したこととまた違った部分として自分が話せることがないか考えた時にですね、自分の自己紹介にもなるんですが、ザンビア・プログラムという形で協力隊に参加したのが、私は 2 回目になります。

1 回目は平成 12 年度 2 次隊ということで、中米のドミニカ共和国に同じ理数科教師として派遣をされました。その時の経験が元になって、広島大学に入学したいと思ひましたし、協力隊にももう一度行こうと思つたわけなんですけども、その 1 回目の協力隊の経験と 2 回目の協力隊の経験の違いから、多分、ザンビア・プログラムの教育活動の成果が書かれるのかなと思ひますので、私にとってのザンビア・プログラムから得たものという形で話をします。

端的に言つてしまえば、ボランティアという形で協力隊に参加したということで、1 回目も 2 回目も似たような部分はあつたんですけども、やっぱり、こう何かしら貢献したいという思いで行つてたと思ひます。ただ、ドミニカ共和国という国に行つた時のことを振り返つてみて、自分の取り組みは、やっぱりどっかで日本の教育というのが前提になつていて、日本の教育というレンズでしかドミニカ共和国の教育を見ていなかったな、というふうに感じています。ですから、自分が考えていることと、ドミニカ共和国の先生方の意見が食い違ふとか、そこでの一致点を探すようなことができないまま、終わってしまったというのが、今思つると自分の反省点なんだろうなと思ひています。

それに対して、ザンビアでの協力隊経験っていうのは、もちろん自分自身が十分に理解できない部分も有りはしたんですけども、例えばザンビアという国の教育を考える上で、ザンビアの歴史とかですね、文化とか、社会、もしくは、ザンビアに関わる国際協力の動き、動向というんでしょうか、そういうものを派遣される前に大学の中でいろいろと考える場があつたと。それをもとにして、じゃあ何ができるんだろう、協力隊として何ができるんだろうということを考えようとした。十分できたと自分で思わない部分がありますけども、そういう形で物をみようという意識は高かつたと思ひます。ですから、もちろんそれでかえつて、物事を進めれなくなった時もありましたけど、そこはそのザンビアっていう国の、ザンビアの先生方、もしくはその生徒たちのペースつてものを意識した関わりがあるんじゃないのか、それで何ができるんだろうか、ということ意識することを学べた

というところは、自分の中でもザンビア・プログラムから得たものと感じています。それが自分にとってのザンプロの成果かなというふうに思っています。

また色々ご意見とかもらえたらと思いますので、とりあえずこれで自分からの意見は終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

菅原

それでは、ちょっと座ってお話させていただきたいと思います。ちょっと立っては緊張するので。

JICA 人間開発部の菅原と申します。今日はですね、ザンビア・プログラムそのものを担当している立場ではなくて、ザンビアで実施しております、技術協力プロジェクトの授業研究支援プロジェクトを担当している職員として、今日はこちらに出させていただくことになりました。私はザンビアの他にも、ケニア理数科、先ほど池田先生からもご紹介がありましたけれども、ケニア理数科プロジェクトですとか、あるいはホンジュラスで実施されています、算数協力のプロジェクト、そういったプロジェクトを担当しております。ですので、教育協力を実施する立場から見た、こういった JOCV と大学との連携のプログラムに対する意見というのを言わせていただきたいと思いますというふうに思っております。

今日、前半の報告を聞かせていただきまして、非常にこのプログラム自体、先進的なプログラムであるなという風に前々から思っていたんですけども、お二人の方の発表を聞かせていただいて、さらにその実践的な人材育成というので、ちょっと正しいのかわかりませんが、人材育成面では非常に効果の高いプログラムではないか、という風に改めて思いました。というのは、技術協力プロジェクトを実施している中で、一番鍵になるのが、やはり専門家の方々、現場に入って実際活動を行う方々です。これまで実施していた中でも、途上国からの要請というのは、どんどんニーズが広がっていきますし、これまでのようにフィリピンだけ、ケニアだけということではなくて、ケニアでやっているんなら他の国でも、ザンビアでも、ウガンダでも、マラウイでも、というふうにどんどんニーズがいろんな国からあがってきています。ですので、それに何とか答えていきたいというのと、それと、先方からの要請の内容についても、とにかく専門家一人来ていただいて何かやっていただきたいということではなくて、非常に具体的に、授業の、理数科の、例えば理科の授業を変えたい、どうしたらいいか、というような非常に具体的な技術指導が求められるようになってきています。

このような途上国からの要請に応えていくためには、非常に高い専門性とそれから途上国の現場に対する経験、知見、そういったものを持った方、そして熱意を持った方、というのを探すのが必要になってくるんですけども、非常にそれは難しいと。そして、ポストを例えば公募しても、中々すぐに手が挙がる訳ではありませんし、人を見つけるのが難しいということがあります。

そういった中で、こういったプログラムで、現場のザンビアでの経験もあり、かつ協力

隊に行つて二年間活動してきました、というだけではなくて、活動しながら現場のニーズに応じた研究をされてきた方というのは、プロジェクトを実施する立場からすれば、非常に期待するところが大きいというふうに思います。先ほど馬場先生のご紹介ではこの業界に入られたのは3名ということでしたが、私は少ないような気がしますけども、でも国際協力の実践に貢献するというのは、何もその業界の中においてなくても、研究という立場での貢献も可能ですし、学校現場では子供たちにそういった経験を伝えていくといった意味でも、貢献できると思いますので、それから先に裾野がどんどん広がっていけばいいなというふうに思います。

私のほうからはプロジェクトを実施する、教育協力を実践するという立場からですね、このプログラムの今後にさらに期待したいと思います。

司会 (馬場)

ありがとうございました。非常に過分なお言葉で、もう少しクリティカルな意見が出てくるかなと思いました。議論に期待したいと思います。次、どうぞよろしくお願いします。

清水

広島大学大学院国際研究科の清水欽也と申します。私はその紹介にもありますように、2008年からこの国際協力研究科の方に参加させていただいております。以前は教育科学研究科におりまして。それ以前はいわゆる国際経験というのはそこそこあったんですけども、本格的に国際協力に関わり初めてまだ2年目です。そういった意味で、恐らくこの前に立ってる、司会の馬場先生を含め5名いる中、多分協力隊経験がないのは私だけだと思います。ということで、まだ私はザンビア・プログラムの学生をフルのサイクルで見ておりません。そういうことですので、成果としては語りにくい部分があるんですけども、その一方で、ある種ちょっと新しい見方といいますか、私自身、協力隊、あるいはザンビア・プログラムというものが、こういうものだったんだ、といういくつかの発見がありましたので、それらを今、この機会に述べさせていただきたいと思います。

一応、このシンポジウムの論点に沿ってお話させていただくとすれば、その教育面と研究面ということなんですけども、まずは教育面に関して、私は昨年の8月と今年の8月、ザンビアの方に巡回指導に行かせていただきました。特に今年行って思った事は、昔から“男子三日会わざれば乱目すべし”、ということわざがありますが、まず学生たちの成長に驚かされました。出発前いろいろありまして、ほとんど下調べもしない状況で行ったにも関わらず、学生たちが色々先回りをしてくれてまして、ほとんど何も考えなくても現場で活動ができました。これもう一週間余分にいたら、私痴呆症になって帰ってくるんじゃないかと危惧を抱くほど、よく動いてくれました。恐らくこれはですね、もし学生が私の側において、ああしなさい、こうしなさい、という指導の中で活動した中では決して育っていない力だと思うんですね。彼らが普段から自立した、現地に根付いた問題に基づいてその

解決活動をおこなっている。予想される問題点というものを彼らなりに考えてそれに基づいて行動してるっていうことは明らかに、大学の人材育成の側から見た能力向上の兆しだと思っています。

次に研究面に関してですけども、一応本学では派遣前にいろいろ専門科目とか授業等を行いますけども、やはり現場に行って、目の前の生徒を教えてみて、それでその中で気づいた問題、それは非常にこう、理念的なものではなく、実践に根付いた問題というものを深く、あるいは細かく見れるようになっていきます。例えば、これは理科の学生なんですけども、今年 8 月に行ったときにですね、生徒に朝顔を育てさせて、その観察、スケッチをさせたところ、ところが花は咲いてないのに、花を 3 つも 4 つも書くと。その学生が、生徒に「何で花があるの？」って聞いたら、「そのほうが綺麗だから」。例えばこういう事例を元に学生たちは「何でこんなふうに考えてしまうの？」っていうふうな疑問を持つんですね。この疑問っていうのは、実は研究の一手手前で、じゃあ、生徒たちに観察をさせるためには何が必要なのかっていうことは、これ日本でも十分研究テーマになるんですよ。例えばこの問題を、日本の理科の先生に投げかけたとしても、多分きちんと答えられる先生は 40 % から 50 % ぐらいかなと。観察において、視点をもったスケッチをさせる際にはどの視点をもって観察させる、そういう習慣を生徒にどういうふうにつけさせるのか。こういうあたりを、基本的には私は国際協力というよりも理科教育の人間ですから、そっちから見ても非常に面白い。

学生たちは現場に行って、実践に取り組むことによって非常にユニークな問題を浮かび上がらせてくれる。そういう意味で非常に、このプログラムは、私が言うと自画自賛になりますけれども、非常に有益な効果をもたらしてるなど。

ただ、まあ、問題点がやはりありまして、これは実践者、実践をよくされればされるほどぶつかる問題点なんですけども、実際に向こうに行っちゃうと、目の前の問題解決活動にのめりこんじゃって、それを問題解決やっている自分を客観視する暇がない、する余裕がない。ですから、なかなか自分自身の経験を体系化することができないんですよ。現地での問題っていうのは何だって向こうに行ってる学生に聴いていると、あれもこれもという形で出てきちゃう。それを研究に生かそうとすると、なかなか焦点が絞りにくい。あるいは自分はこの問題に対してあれもやってこれもやって。もちろん実践ではそうしなきゃいけないんですけども、研究としてはある種、その原因と結果っていうことを結びつけていかないといけない訳ですから、ひとつひとつの行動が、じゃあどういふふうにい生きてきたのか、これがなかなか見いだすことができない。もちろんそのあたりは私たちが巡回指導に行った際、あるいは JOCV から帰ってきた際、非常に苦労している点です。

もう一点、問題点として挙げられるのは、せっかくいい研究をしているんだけども、隊員の中でもなかなか普及していかない。お世話になってる事情もありまして、ザンビアの事務所の方に、修論とか修論を短くまとめたものを送るんですけども、研究って聞くと、JOCV の一般隊員から見ると、敷居が高く思われるせいか、なかなかそれを手にしてくん

ない。また、その使ってるボキャブラリーも非常に難易度の高いものなんで、そういう意味での蓄積が成されていない。このあたりがすこし今後の課題かなとふうには考えております。

今のところ以上です。

久保田

関西大学の久保田と申します。先ほど紹介にありましたように、私もフィリピンに理数科教師として、馬場さんよりもちょっと前くらいに行きました。現在は、関西大学の方で教えているんですけども、私のゼミからも毎年 1、2 名ほど、協力隊に参加しまして、これまで大体 15 名ほど隊員として出かけて、あるいは帰ってきて、そういう国際協力なんかの仕事に就いております。

今日はですね、木根さんと菅原さんが一緒に来てるんですけども、この二人とは、ミャンマーの教育プロジェクトで一緒させていただきまして、ミャンマーの初等教育なんですけども、子供が楽しんで勉強にいける、そういうような教育支援を行うことで、以前一緒に仕事したことがあって、今日はとてもうれしく思っております。今日言われたと思うんですけども、特に事前に打ち合わせをしている訳ではなくてですね、外部の者として議論して欲しいということなので、まあ適当に色々意見を言わせていただきたいと思います。

私自身も、国際協力のプロジェクトを、大学としてというよりも、教員として持ってまして、現在、シリアとフィリピンに毎年学生を派遣をして、大体春休みと夏休みに行くんですけども、大体春に 1 カ月半から 2 カ月くらい、それから夏にも 1 カ月半くらい学生が行ってですね、向こうの、例えばフィリピンの場合だと、小学校の先生に対して、コンピューターを使った教育をどうしたらいいのかという指導をしたり、あとシリアに関しては、パレスチナ難民の学校に入りまして、そのパレスチナ難民の学校の子供たちが、よく考えるような授業をするにはどうしたらいいのかということで、先生に向けたワークショップなんかを行ってるんですね。このプロジェクトは広島大学のように、大学として組織的にやってるプロジェクトではないんですね。まあある意味で私個人がやっているという形で、それに興味のある学生が、学部の 3 年生から参加をして、興味のある学生は大学院に行ってドクター課程にいつている学生もいるんですけども、そういう意味で今日の広島大学の話を聞いて、とっでもうらやましく思ったんですね。

先生が 3 人いて、組織的に単位も出してですね。それが学生の学業になるというような、そういったつながりができるということは、とても素晴らしいことだと思うし、現在私たちのところにもですね、大学院 GP といって、文科省のほうから、そういう新しい教育プログラムの支援というのを一応来年度まで受けるんですけども、そのおかげで、これからどういうふうにもそのプログラムを組織化していこうかということで、大学として検討してるんです。多分、国立大学の国際協力研究科というような組織と違って、私立大学でですね、あんまりその国際協力ということに対して関心がない。大学としては関心がないんですけ

ども、何人かの先生方は個人的にいろんな活動をしてるんですね。そういう活動をうまくつなぎ合わせるようなことを今後していきたいなと私は思ってるんです。そういう意味で、広島大学には、こういう活動をもっと積極的にアピールしていただいて、こういう素晴らしい実績をあげて、学生も成長してるんだと、どんどん出していただけると、我々としても後について行きやすいなという思いであります。

あまり褒めてばっかもあれなので、今日の話聞いて感じたことなんですけども、言いたいと思います。まず、本プログラムは修士課程で、3.5年ですよ。ちょっと長いのかなって感じがするんですよ。最近の修士課程っていうのは、1年のコースみたいなのもあってですね、特に教員なんか多分1年のコースとかがあると思うんですけども、そういう中で修士の学位が取れるというのが魅力になってると思うんですが、よほど国際協力にコミットをして、将来その方向に行くんだという学生にとっては魅力的だとも思ってますけども、開発教育を授業で導入しようか、それで大学院いこうか、というふうに考えている人達にとってはちょっと長いのかな、という感じがしています。

2点目は、修士課程で2年間行くということなんですけども、私のとこの修士の学生を見ておいても、やはりまだまだ、学力の点でいうと、十分じゃない。マスターを出たぐらいからやっと研究方法論とかですね、そういうことが身について、ドクターの学生がしっかりとフィールドワークとして2年行くというのは、それなりにしっかり勉強できるのかなという感じはするんですけども、マスターで10カ月やって行くというのは、ちょっと早いのかなという印象もあります。これはその大学の学生のレベルによっても違うのかもしれないけども、私が今マスターの学生の指導をして感じるのは、やっぱりそのいわゆる研究方法論のレベルも含めて、専門の知識という点でも、2年間やってこいというのはちょっと長いのかな、という感じはしますね。で、私のところは大体1カ月から1カ月半くらいで行って帰ってきてそれをまとめさせるという形をやっているんで、そっちの方が、いわゆる勉強という点でいうんですしたらね、そっちの方が、指導をやりやすいのかなという印象を受けました。

それとあともうひとつは、このプログラムは、将来国際協力で頑張るといふ人たちを、どんどんリクルートするという意味で呼んでるとおもいますが、私のところの学生も協力隊に行き帰った後、大学院で勉強して、将来国際協力で羽ばたきたいと思ってるんですけども、やっぱりその受け皿の問題が非常に難しいな、という感じがしておりますね。で、先ほどのジュニア専門員とかっていう話もあるんですけども、なかなかそういうところで方向性が見つからないので、その辺のことも含めてやっぱりプログラムの検討が必要なかなと、今話を聞いて感じました。とりあえず今感じたことだけで。

司会 (馬場)

ありがとうございます。まとめようかとも思ったんですけども、まずは何点かフロアのほうからお聞きしたいと思います。質問でも結構ですし、ご自身の意見でも結構ですので

お伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

参加者（大学教員）

桜美林大学の熊谷と申します。協力隊のOBで、ザンビアに行っておりました。またJICAから出向で、桜美林大学のほうに来ております。

質問なんですけども、修論のための活動にならないか、そこは実際に大学として学生を出す場合に、すごく難しくなるかなと思ってるんですね。私自身ジャマイカで現地駐在員という形でやってまして、研究をしながら隊員活動っていうかですね、やはりそこがすごく難しいな、と思いがして、大学からみるとそこは絶対外せないし、協力隊事務局からするとそこはマストではないわけであって、隊員自身の立場っていうのもありますし、そういう中ですね、修論を出すために参加するっていう、それを目的にしてやった場合に、抗議等は起きないものか。12人今まで行かれた実績の中で、どういう風になってるのかわかっていうのを教えていただきたいなって思ってます。以上です。

司会（馬場）

はい、どうもありがとうございます。他にありますかでしょうか。関係する質問でもかまいませんし、他の質問でもかまいませんので。

参加者（JICA）

JICA地球広場にいる小中と申します。私ちょうどこのプロジェクトが始まった時に現場にいまして、本日はこういたった報告を聞かせていただいて、感無量になっています。ここまですごく立派なプロジェクトに育てていただいたっていうのは、池田先生はじめ、皆様ご努力の結果だと思うので、大変うれしく思います。

さて、そんなことで、現場にいた人間としてひとつ、今の熊谷さんの質問にも関係するんですけども、やっぱりあの、協力隊の隊員として、また修士の学生としてきた場合、協力隊の隊員としての活動と、修士の学生としての研究というふたつの側面を持つてくると思うんですけども、例えば、協力隊の隊員として、研究をしなくてもですね、ただでさえ2年間というのは厳しいものなので、現場の状況を知り、言葉を学んで、しかも、もし、働くことが初めてのような方ですと、働き方を学び、もし授業をやらなきゃいけないんですと、シラバスやカリキュラムを理解したうえで、現地の言葉でやらなきゃいけないと。かなりのプレッシャーというか、厳しい状況があると思います。

加えて、研究をしなくちゃいけないということもありますと、かなりの重荷であると思うんですけども、今まで行かれた方はしっかりやられてきた訳ですけども、そこに参加されるっていうのはその2つをしっかりと学んだうえで参加されることが重要なんじゃないかなと思います。来る方のモチベーションというか、やり遂げようという気持ちと、我々しっかりここで自分の研究も協力隊活動も充実させようというその気持ちがものすごく重要だ

と思います。その気持ちをしっかり支えてあげる、現場と学校側のサポートもすごく重要じゃないかなというふうに感じております。

お互いが現地での協力隊活動のサポートと、日本の方での研究活動のサポートと、それには普通の密なる関係を構築して、それぞれが隊員の方をサポートしてあげていく必要があるかなというふうに思います。そういった体制の構築をしていくのがひとつと、どうやって生徒のモチベーションをある程度確保しているのかとか、そういうところの点について今後検討する必要があるのかなと思います。ちょっと感想まで。

司会 (馬場)

ありがとうございました。実はザンビア事務所の立場としてどうかなというのを言ってもらいたいと思ってた頃なので、ありがとうございます。

他に質問ありますでしょうか。もしくはご意見はどうでしょうか。

参加者 (JOCV OV)

先ほど質問させていただいた、平成17年度1次隊ベナンに理数科教師で派遣されていた、飯島と申します。「能力」という言葉がそこにあると思うんですけども、各シンポジストの方で、その能力というので、一番育ったと思われる能力がどのようなものだったのか。例えば研究者としての能力、あるいは教育者としての能力なのか、あるいは人としての、なんというか、生きる力という能力であるとか、というのは、どういうところで育ったところをお聞きしたいです。

司会 (馬場)

はい、ありがとうございます。このあたりでいったん切りまして、質問およびやりとりについてちょっと答えてもらいたいと思います。能力に関係しますが、成果の話で、文化的な理解とか、自立性とか、問題意識の持ち方というような話が出てましたけども、是非今のことに関連しまして、考えておられることを述べていただきたいと思います。先ほど質問ありました、特にザンビア隊員だった木根さんには、隊員活動と研究というのをどういうふうにバランスを取られたかというあたりをお答えしていただければと思います。

それではよろしくお願ひします。シンポジストの方々、一言二言いただければと思います。

木根

じゃあ失礼します。まずは、隊員としての活動と修士の学生としての研究という話に関して、自分が活動していた頃を振り返りながら話をさせてもらいたいと思います。

先ほども言いましたように、私自身は協力隊へ2回行きまして、1回目の協力隊の時によく疑問と言いますか、大きな国際協力の課題みたいな、ちょっとおこがましいかもしれま

せんけど、思っていました。1回目の国、ドミニカ共和国の中で、自分自身がこれまでの隊員なり協力活動の経験を引き継ぐこともあまりなかったなと思いましたが、自分がやったことを次に続いていくってことが、うまく流れていないっていうんですかね、いわゆるその点としての活動で終わってしまっているんじゃないのかっていうのが、非常に問題意識として持っていました。そこで、学校訪問したら、JICAの実は大きなプロジェクトが、教育プロジェクトがあつて、でも誰も使わずにその教材は眠っている、という話もあり、いろいろ見えてきて、これってどうなんだろうなと思ったことが、結局広島大学に入ったきっかけだなと思ったんです。

まあ教育という分野の特徴だとも思うんですが、やっぱり途上国の教育に関わりを持つための、いわゆる長期的な視野とか、長期的な関わりをじっくり持つのが、自分自身は必要じゃないかと思った。で問題意識を持ってまして、先ほどの質問のほうにいくんですけども、そういうところを考えたときに、いわゆる修士としての研究活動を行うっていうのは、もちろん隊員としての活動の捉え方にもよるんだとは思いますが、直接その子供たちとか先生たちに対して、何か具体的な取り組みを示すという活動も有る半面、その国のことをしっかり理解するというような部分もあるんじゃないかと、自分としては思っていました。

ですから研究というアプローチで、ザンビアの教育事情をじっくり理解していくこと自体は、それはそれで協力活動の一面として捉えることはできるんじゃないのかというふうな思い方を自分は持っていたということですね。ですからまあ自分の中でのコンフリクトというのを、どちらかといえばとリンクしているという気持ちをもちながら取り組んでいったという風に思っています。以上です。

司会 (馬場)

ありがとうございました。

ちょっと時間的なことも考え、次の話題に順次動いていきたいと考えていますので、今の質問に答えつつ、次の課題、「今後何をすべきなのか」ということについても触れていたけると、助かります。木根さんにはまた、後ほど言っていただければと思います。

菅原

それでは、まずは先ほどのご質問の中でどういう能力が一番育ったと考えられるのか、というところで、専門適性の面からお答えしたいと思います。それにこたえる形で今後の課題のこともお話できたらいいかなと思います。

今アフリカの教育プロジェクトで、たくさんの専門家の方が活躍されておられますけども、そのうち8割から9割くらいの方々が、実はJOCVの経験者です。これが何を意味しているかという、やはりアフリカの教育現場で長く活動していくためには、ある程度入口の段階で協力隊のような現場、本当に学校の中に入って、直接子供たちを教えて、その

子供たちの問題を把握し、また同僚の先生たちとも話をしたりすることで、教育の、本当の現場の先生たちがどういう問題を抱えているかというのを、まず明確に理解をする、理解するというのは、知識として理解するのではなくって、まさに経験として実感するっていうその経験が非常に重要なんだろうなというふうに思います。で、そういった経験があるからこそ、専門家として実際に活動する場合には学校の先生たちと話をするっていう機会よりも、むしろ今日いらっしやっていたような、教育省の局長ですとか、次官ですとか、そういった上のレベルの方と話をすることが多くなってきます。ただ、そういった話をするときにも、知識として知っているっていうことではなくて、現場の経験として知っているということが非常に大きな力になるのではないかと思います。そういう意味で、協力隊の経験は、このザンビア・プログラムだけに限りませんが、そういった現場の経験を持っているというのは専門家として活躍していく上でも非常に大きな力になるというふうに思います。

今後の課題のところですけども、とはいえ、協力隊経験だけで、すぐに専門家になれるかというところではなくて、そこには大きな壁というか、乗り越えなければならない壁があるという風に聞いています。それは専門家の方にも、何が一番違うのかというのを時々聞くんですけども、協力隊経験しかなくて、初めて専門家として派遣される時に、一番苦勞されるのは、カウンターパートとの距離の取り方であるというふうに聞いています。というのは、協力隊の活動がまさに、修士の学生としての研究としてもそうですけど、自分が中心なんです。自分が何をやるかというのが一番重要で、周りの人に何を与えるとかです、何を残すかというのがちょっと次になってしまうと。これに対して、専門家の場合には、例えば任期が長くて2年とかです、決まっていますので、自分がいなくいなくても、自分がそこで始めたことが残るようにしないといけないということがあります。それは当然自分がずっと一生そこにいる訳ではありませんので、周りの教育省の行政官の方であったり、学校の先生、そういった現地の人に自分の知識なり経験を伝えていかないといけない、ということが求められるように思います。そうすると、自分がとにかく前に出て活動するというスタンスと、自分が後ろに引いて、現場の人にやる気をもって活動進めてもらおうようにするっていうのは大きな隔たりがありますし、ここは専門家の方はみなさん最初苦勞される場所です。だからと言って、このザンビア・プログラムの中でさらにそこまでというのは、大変難しいと思いますので、それはみなさんなり、そのザンビア・プログラムを終了されたその後、みなさんどういう風にやっつけられるかということなんだと思いますけども、もしこのプログラムにはいられる前に、将来専門家として活躍したいというような希望をお持ちの学生さんがいらっしやったら、専門家経験のある先生方もいらっしやるわけです、専門家と協力隊との違い、教育協力を実践する際に、ボランティアとして実践するということと、専門家として実践するということとはまた違う関わり方があるのだというようなことを、意識しながら話できればいいのかなというふうに思います。

清水

私の方からは先ほど、研究と実践とのバランスに関する質問に対して答えつつ、その今後の展望を語っていきたいと思います。

実践と研究、まあ研究のための活動に陥りがちになってしまうのではないかと、という疑問をもたれているようですが、この部分は正直、私も馬場先生も事あるごとに、話をしています。なかなかこのバランスって難しいよね。ただ、唯一の、これに関する唯一の解決方法は実践と研究をやっぱり有機的につなげていく努力じゃないかと思うんですね。と言いますのが、先ほど松原先生のご発表に関してもそうですし、澁谷さんの発表に関してもそうですし、いずれもやっぱり修論のテーマになっているのは、松原先生、あるいは澁谷さんの活動の中で見つけた問題を、それを解決していったるにすぎないんですよ。それを研究論文という形で、まとめる。だから研究と実践、あるいは研究と活動っていうものを対立的に捉えるんじゃないしに、あくまでも実践の中で問題を見つけていく。で、それに取り組む。で、その解決策を、その解決していった自分の姿をある種客観視して見ていく。それで自分なりの教育協力の理論を作り上げていく。こういう形が私は理想じゃないかと思うんですね。そういうような形でザンプロの隊員を育てていくために、じゃあ我々大学が何をすべきか、っていうところを考えていくと、協力隊に行く前に、問題の発見の仕方とか、解決策の様々なオプション、現段階でこういう研究はこれまで研究なされてるよ、というインプットは必要でしょうし、彼らが帰ってきた後、じゃあ彼らがやってきた実践っていうのはどういう意味を持つのか、っていうのをこちらから問いかけるってことで、その経験のまとめといいますか、体系化といいますかを促していく。ここは私自身、特に気をつけているつもりです。ですから、研究が先にあるって、実践をするんじゃないんですよ。実践をしていく上で問題を見つけて、それを研究の対象にしていくっていう形にすれば。それでも、もちろん一般隊員よりかは負荷がかかります。けれどもそれなら何とか、本人の努力の範囲で収まるんじゃないか。もちろん、その先ほど馬場先生のほうからメールゼミの話がありましたけれども、メールゼミの最中にそういう促し方をしていく、という形をとってます。

また今後の展望ということについて述べますと、先ほど馬場先生の話の中で、その UNZA とのワークショップを実践する中で、UNZA の先生から、こういう研究の仕方も有るんですねというコメントが出たというくだりがありました。これこそ、大学ができる技術移転なんじゃないかと思うんですね。現場の状況の中から問題を見つけて、それを研究対象としてるんです。で、そこから得た知見を次へとつないでいく。ですので、ある種、広島大学のザンプロの学生が協力隊員として行くことによって、ひとつの研究のモデルを現地の人たちに見せていく。それをザンビア共和国、あるいは大きくいきますと、アフリカ全土に広げていく。

私実際これまで、いろんなアフリカからの研修生を受け入れてきましたけれども、問題点としていつも感じることは、彼らが研究したいっていうことがまず、現場には根ざして

いるんですけども、研究としては評価されていない。あるいはその研究テーマにしても取ってくるアプローチがどっかの、いわゆる ETA の、**Educational Research** って書いてある本の中から引き出してきたようなことばかりなんです。全然自分たちのコンテキストの中で解釈しようとしていない。で、研究と現場が解離しちゃってる。そういう状況の中で、彼らが行って、実践と研究を結び付けてるその姿を見せること。これは今、我々が差し当たって出来る大学による技術協力じゃないか。広い意味で技術協力じゃないかと考えてます。

久保田

今後の方向ということなんですけれども、このような JICA と広島大学との連携をどのように深めていくことができるかが重要だと思うんですけども、ただ、JICA には JICA の方針があるし、大学には大学の方針があるので、そこのかみ合わせの所が、非常に難しいのかなと言うところがありますね。私たちが今、JICA 大阪と大学連携について話し合っているんですけども、まだせいぜい外部講師を大学に呼んで話をしましょうという、その程度のことしか進んでないわけですよ。担当の人があまりそれ以上のことは考えていないみたいで、その辺をどういうふうに進めていけば良いかが今後の課題となると思うんですけども。

それと同じように、学生がフィールドに行って研究したい、それはそれで良いんだけど、例えばフィールドに行く生徒から、私は先生の道具じゃないんですよってことです。ただ道具として使われて、データを集められて帰ってきたのでは、生徒としては迷惑という感じになる、と私は思うんですよ。その辺でどうやって還元できるかということになるんだと思うんです。ひとつはアクションリサーチみたいな方法をどのように上手く 2 年間の活動の中に取り入れながら、そのいわゆる PDS というか **Plan, Do, See** のサイクルを繰り返す中で、開発途上国の教育を変えることが現場に即した形でやっていくことが必要だと思うんです。

ただ僕は行く学生のレベルの問題もすごくあると思うんですよ。木根さんは 1 回協力隊に行っているわけですけど、だから 2 回目に行くという余裕があるわけですよ。もう少し自分を客観的に見れるんですけど、例えば新卒でね、大学院に上がって、10 ヶ月経ったらすぐにザンビアに行くということになると、いわゆる教師経験もないし、日本の現場で何が起きているのかもわからないままなのに、2 年間ザンビアに行ってやっていくことは難しいのかなという感想は持ってます。その辺を大学教育として協力隊活動をどう位置づけるのか、そういう学生に対してはどのような指導をしていくのかを含めて、検討することが重要かなと思うんですけど。私としては、現場経験があったり、教育経験がある人たちが、そういうところで自分ことを振り返りながら、もう一度行くと行くことは現地にとってとても良いことだと思うんですけど、この辺の切り分けが大学としても難しいのかなと思うんです。

司会 (馬場)

ありがとうございました。各講師たちのご発言で私たちが取り組まなければいけない課題みたいな物が出てきた気もします。研究と実践との関係、研究と活動の関係というのは、先ほどのシンポジストの方々の話にもありましたけれども、これはつなげていく必要がありますし、この協力活動だけじゃなくて、昨今よく言われているアクションリサーチですとか、リフレクティブプラクショナーと言われる実践をしながら反省をするっていうんですかね、そういう意味での研究意識みたいなものがすごく高まってきていると思います。そういう形での指導であるとか、私たちの中で色々なサポートはするようにしているけれども、学生それぞれの力の違いもあると思います。実際、派遣先でいろんな問題と向き合っていかなければならないので、そう簡単には上手くいかないと思います。

今、上がった JICA と我々大学の関連ですけれども、どういうふうに深めていくかということは一いつ考えたいなというポイントであり、広島大学の側でも考えていなければならぬことなんですけど、もしフロアの中で大学関係者や学生でも良いと思いますけど、こういうサポートが必要なんじゃないか、もっと力を発揮するためにはこうすれば良いんじゃないかなんていうことも考えていきたいと思います。フロアの方から質問も含めてですけどご意見を伺いたいと思います。いかがでしょうか。

参加者 (大学教員)

私も JICA で 10 年前、保健医療の専門家をしていたんです。その時にこのようなプログラムができると聞いたんですけど、約 10 年近く続けられたこと、これまでご尽力に非常に尊敬いたします。特に広島大学のように国立大学法人として、JICA と大学ぐるみで協力していくことは、非常に大事で非常に大変だと思うんです。あと、私はつい先月までザンビアにいたんですけど、やっぱり協力隊の皆さんもこういった在籍中に大学院に行ってみたい、あるいは協力隊が終わってから、何らかの進路を考えている事例が多いと思うんです。広島大学の事例はやはり、他の大学、例えば個人的ではなく協力したいという教員は全国結構多いと思うんですけど、そういうのをぜひ他の大学でも普及させるようにしていく必要があると思います、広島大学でも学業と研究の両立はご苦労があると思うんですけど、そういった事例を例えば、JOCV の方がきつところだったら、ケースメソッドを教授されたかということをお聞きしたいのと、ザンビアでは今理数科隊員とかエイズ隊員のグループ派遣とかあるんですけど、その他の領域はしないのかということもぜひお聞きしたいと思います。

司会 (馬場)

ご質問ありがとうございました。他、ご意見お持ちの人は。

参加者 (JICA)

JICA の今、本部におります、乾と申します。

当時、ザンビア事務所で本プログラムに関わらせていただきました。池田先生、馬場先生をはじめとする、関わられた隊員がご努力された結果、いいプログラムになっていったことに感謝したいと思います。現場におりまして、先ほどから、協力隊活動と研究活動は両立するのかなということ、結論から言いますと非常に両立しているのかなと思います。現場の気づきが体系化されて研究の土壌になっているのかと、私は非常に感じていました。かなり個人の努力によるところが高く、それをサポートする体制がもう少しあった方が、JICA 側もそう思っていまし、大学側もそう思っていると思います。

私の意見というか感想でございますけれども、組織的に広島大学はザンビアの教育の現場の経験を集積されるということは、馬場先生と話したときに、日本の大学で一番持った大学なのかと。蓄積しながら体系化してですね、もちろんザンビアの方に発表していただく、気づきの点をフィードバックしていくことが一番重要なのかと思うんです。やはりアフリカの教育の開発の現場でですね、日本がこういった点で優位性があるって、こんなアプローチがかけているので、今後ドナーの中でも方向性をリードしていく、発信力に繋がっていくということが、JICA としても望ましいことだと思います。今菅原さんもここにおられますけど、皆さんご存じの通り、SMASSE というケニアの理数科の授業中心のプロジェクトを 31 カ国で展開しているわけですが、そこの何らかのインターベンション、もちろん隊員レベルでは非常に負担が多いので、そうではなくて、集積化、体系化したところで、そういった JICA のやっているプロジェクトとの関係、またはもっと大きく言うと、アフリカの教育開発の中で、上手く日本ができるようなところを検討していただくことが次のステップになると思います。アフリカ人はやはり日本の理数科に非常に期待していますし、リスペクトもしているんで、せっかくこういった集積、体系化できているところで、何かそういう工夫ができないのかなというところがひとつ思っているところです。

司会 (馬場)

前半のサポートのところをもう少し詳しく聞きたいのですが、彦根調整員もおられますので、すいません、ご指名して。こういうのがあったら隊員が助かっただろうというのを言っただけでませんか。

参加者 (JICA)

私は、今年の 8 月末までザンビア事務所におりまして、小中さんのあと、このプログラムに関わってきたんですけども、ちょこちょこ私も言いたいことはこのプログラムに関して言わせてもらってきたので、この場で改めて言うことはほとんどないと思うんですけど、テレビ会議システムみたいなものをもう少し有効活用できないか、例えば各学期休み必ず 1 回、大学と現地の修士の学生を繋いで、一時間または二時間ぐらい繋いでみる。効

果があるのかは、ちょっと私もわからないんですけど、ひょっとしたらやっている内容はeメールでやってらっしゃることと同じぐらいの効果かと思うんですが、もしそういうサポートがあればいいのかな。あとこれはまた全然関係ない話になってしまうのかと思うんですが、みなさんが言われているように、私も卒業生第1期から見ていて思うんですけど、99%の方が活動のための研究をやっていると思っている。むしろ目の前の活動に一生懸命になりすぎて、私はボランティア調整員の立場で他のボランティアの方と同じふうに対応するということから見れば、ボランティア活動を一生懸命やってくれているので、すごく嬉しいんですけども、君、連携プログラムで来ているんだから、研究やらなくていいのと言いたくなる方もいたぐらいなんで、先ほどあったように、木根さんのように一度経験なさっている方とか、澁谷さん松原さん、行く人は経験があつてボランティアとして来てる方、そうでなくて学卒で来た方というサポートの温度差をつけてあげたら、現地で頑張っている院生の方達には有効なのかなと思います。以上です。

司会 (馬場)

突然のご質問にも関わらず有り難う御座いました。他は何かありますでしょうか。

参加者 (JICA)

短期ボランティアなんかは有効に活用していただければなあと思うんです。他大学で例えば広島大学さんと同じようなことをしようと思っても無理なので、例えば広島大学さんが現地に行かれているので、そういう長期の方を最大限活用していただいて、こういう時期には短期ボランティアっていうことで、他の大学生も手を挙げられるようにすれば、またそこにシニア海外ボランティアの要請をしていただければ教員も行けるのではないだろうかと思います。広島大学さんが現地でやっていることをJICAのお金で現地で活用できるのではないかとということで、JICAのスキームをもっともっと活用してもらえればなと思いました。

司会 (馬場)

ありがとう御座います。その点につきましては実は、すでに徐々にではありますけど、やってまして、このプログラムで行った学生が帰って、ドクターに入り、短期ボランティアにいった場合ケースとか、他の国でボランティアをやって、マスターの学生として入ってきて。短期ボランティアとして別の活動をやるというケースがあります。先ほど久保田先生の方から3年半は長いっていうご指摘もありましたけど、一方では長いプログラムもあった方がいいなど、みっちり活動するっていうことが本人の成長につながることもあるんです。他方、全員が全員それに参加しなきゃ駄目っていうということにはならないだろうということで、数ヶ月、1ヶ月ではちょっと短すぎて相手にとってもメリットがないってよく言われますので、3ヶ月4ヶ月ぐらいの期間から半年ぐらいの期間にかけて行っている

例は、今ぼちぼち出つつあります。それと関連するかと思うんですけど、実は、大学が大学であるゆえんでもあると思うんですけども、JICA のスキームだけじゃなくて大学ではインターン制度を持ってまして、私の先ほどの発表の時に言ったんですけども、その中で **Examinations Council of Zambia** というところに、統計に興味がある学生が行って、山とあるデータを使いながら、その分析のお手伝いというようなことをやったりもしました。今日はザンビア・プログラムが中心ですので、ザンビアへの 2 年間派遣ということを中心にお話させていただいているんですけども、他方でだんだんそういう広がりを持たせつつあるということところでしょうか。その他にご意見ご質問はありますでしょうか。

私として気になっていることがあります。知識の活用というんでしょうか、先ほど出てきた能力のこととも関係すると思うんですが、一方個人レベルで能力がどう育ったかということがあるんですけど、色んな修論、色んな形での経験が蓄積していくわけですけども、どういうふうに関今後個人として能力を蓄積しながら他方でその知識をどのようにつなげていけばいいかなっていうことは、今良く考えていることです。皆さん何かご意見というんですか、こういうふうにやったらいいんじゃないかということがもしありましたら、言っていただけたらと思いますけどいかがでしょうか。

参加者 (JICA)

さっきの支援の時に言いかけたことと今のことに関連してなんですけど、UNZA の大学の教育学部の先生ともう少し連携できないのかなと思っていて、馬場先生が来られた時のセミナーなんかでも結構気づきみたいなことがあったんですけど、それをもう少し隊員のサポートをやっていただきながら広島大学の研究結果をフィードバックしていただいて、彼らの頭をもって解釈してもらったり、理解してもらったり、また自分の研究がもう少し育っていくのかなって思います。将来、木根さんとか松原さんとか皆さん立派な学者になられたときには、ザンビアの方と一緒に共同研究できる、これは夢のことかもしれませんが、アフリカの経験のある人が、アフリカの研究者と一緒に共同研究ができるような母体になっていくということは大きい夢かもしれませんがいいのかなと思います。ということで現地の大学ともう少しつながりを持つということはひとつヒントというか考えとしてあげさせてもらいます。

司会 (馬場)

今おっしゃっていただいたような現地の大学との連携ということは我々も凄く考えながら、なかなか難しいなと考えていて、そこのところは時間をかけてやらなければならないと思っています。つい先ほど経験したことを補足させていただきますと、広島大学の中で現在 SMASSE の関係で教員研修というのを受け入れています。そこに参加されている方々は、日本でいう各都道府県の指導主事レベルの方々、校長先生という方など、現場の方が多くですね。そういう方が 20 名ぐらいの研修を行っています。他方で、広島大学の別のプロ

グラムで、アジア・アフリカ・ダイアログがあり、これはあくまでも研究者の集まり、集団作りって言うんでしょうか、アジアの教育経験、開発経験をアフリカの研究者の持っている研究とどういうふうにつながられるか、深めていけるかというようなネットワークづくりプラス、知識の深まりみたいなことを今やろうとしているんです。ここからがメインのお話なんですけれども、実は参加者というか、今日前におられた教育省の方々なんかも言っておられるんですが、アフリカの研究者、特定の名前を挙げると問題があるんですが、研究者がなかなか現場においてこないという問題があります。教育を改善するとき、「せっかくアフリカの研究者がいるのに、なかなか私たちのためにやってくれない、私たちがなかなか彼らの知見を活かせない」というお話がありました。そのあたり、研究者は研究者で自分たちの研究の中で何かやりたいとは思っているものの、まだ十分に研究をやっていることと、学校だけではないんですけど、ポリシーを含めて、現場でやろうとしていることがリンクされていないようなところがあります。そのあたりに私たちの役割って言うんでしょうか、今後どういう形で私たちは関わっていけばいいのかというところに、クリアすべき課題みたいなものが見えたような気がします。先ほど言いました、研究と実践というのは、何もこのザンビア・プログラムに参加している学生達だけじゃなくて、私たち研究者や実践家の間でも、なかなかそこは乗り越えていない、もう少し大きな溝がそのあたりにあるので、そこをどうやって埋めていくかは、今後の大きな課題だと思っております。どうでしょうか。今まで話したことで、何かご質問やご意見があればお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。もしくは話題を変えていただいても結構ですが。

参加者（大学教員）

鳴門教育大学の小野由美子と申します。今日は、色々のご披露いただき有り難う御座いました。ひとつだけ、ザンビアのプログラムで、現地の教室で実際に授業をやられて、その後も、修士論文の提出に繋がるもの、個々の先生の授業実践を対象としたものが多いんですけど、例えばやがては教員の質を高めるということをシステムに作り上げていく、そういうシステムがザンビアにはあるということを知っているんですけど、それをより良いものにしていくという時には、教育変革とかですね教育イノベーションとかを学校とか教育に導入しようとした時に、それがなぜ根付かないのか、教師のレベル、それから組織のレベルでなぜ根付かないのか、教育学部のそうした関連のある研究と今後連携を図っていくとか、そういうことは可能性としてお考えでしょうか。

司会（馬場）

他にご質問はございますでしょうか。

参加者（一般）

何度もすみません。先ほど、このプログラムの課題として、学生が自分の活動に熱中し

てしまって、なかなか研究ができないというようなことが言われているのと、最初の事務次官の方が言われていた、そのファシリテーターという役割のことなんですけれども、それは研究者の方々がファシリテーター役をして、例えば問題分析であるとか、関係者分析などをして、教育内容に対してアクションを起こしているのであれば、そういったのめり込むようなことはないと思うんですが、ファシリテーターとしての研修を学生の方にされているのか、PCM、PDM を作るということをやっているのかお聞きしたいです。

司会 (馬場)

ちょっと趣旨が良くわからなかったのですが、ファシリテーターをしているとのめり込むだけじゃなくて、もう少し自分の活動をもう少し反省的に見てるんじゃないかというようなことでしょうか。

参加者 (一般)

まとまっていなくて申し訳ありません。そのファシリテーターというのは、調整役や裏方という意味で、一歩引いた形で現地の人と関わってみるというような意味でファシリテーターという役割があると思うんです。現地の人を先に立たせていくことで、その先ほど菅原さんが言われたように自立発展性という面、恐らく現地の人を主体として、自分はどうのように活動をしていくかという一歩引いた形での役割が研究者の方でもできると思いますし、その研修自体を大学院の方でやられているようであれば、そういった研修をされることで、自分の活動自体、教えるという活動自体にのめり込まずに、他の教員の方とも色々共同しながら、ワークショップを行ったりすることも可能であると思うんです。最初の事務次官の方がどのような意味で隊員の方がファシリテーターをしているということを言われていたのか私にはわからなかったのです。

ザンビア・プログラム参加者

すいません。広島大学学生の澁谷ですけど、教育省の方が先ほどおっしゃった、ファシリテーターというのは、SMASTE の授業研究のプロジェクトの中で学期末に一度、現職の先生方を州もしくは郡レベルで集めて、100人、200人で研修を行って、その学期の中で授業研究をやったときに生じる問題と、科目で苦手なトピック、例えば数学であれば分数が苦手な方が多ければ、分数のトピックを上手く教えるにはどういう教育方法があるかとか、ザンビア人の先生もしくは、教員センターで働いている方がご発表されるんですけど、その時に広大の隊員がファシリテーターになっています。その時に、主に教育方法とか、教育内容の点でアドバイスができて、その中で議論を進めることができるのがファシリテーターだったと思います。

司会（馬場）

本日は、ご多忙にも関わらず、貴重な方々もおられますので、浅井室長にお聞きしたいなと思います。ザンビア・プログラム特定というわけではないんですが、日本の国内でこういう海外派遣というのを教育の中でどういうふうを考えていこうとしているのか、もしくはどういうことが課題となっているのかというようなことについて、ご意見いただければと思います。

文部科学省

ふたつに分けて回答します。ひとつはザンビア・プログラム、国際協力の専門家養成ということに関係すると、これは当然海外経験というのは必要不可欠なものだと思うんですよね。このプログラム自体を目指してくる人たちは、当然そういうふうな目的で来るということを考えれば、JOCVは2年3ヶ月の期間が必要ですし、今大学院でマスターを取るには、2年間が必要である、そうすると合計4年3ヶ月かかりますが、それをこの特別プログラムに行くと3年6ヶ月で修了できる。ここに入ってくる、目指そうと思っている学生は、そういうところから時間的な短縮みたいなことは、メリットと考えると思います。それから、海外の経験ということ、今、文科省の中でも、海外での研修を、単位としていかに認めてもらうか、あるいは大学の中で、単位として、課程の中に位置づけてもらいたいということ、結構強く思っているところです。久保田先生の学生さんは1ヶ月半ぐらい派遣されているということですが、それは単位ということにはなっているのでしょうか。

久保田

現在、そのGPが回っていて、試験的にやってみまして、来年度から単位を出そうということでプログラム化しているところです。

文部科学省

海外に学生が出て行く、ただ単にボランティアいうのではなく、ボランティアで海外に行って学生がそこで何かしらの働きをするというときは大学としても単位として認定できるような制度というものは、今後検討して欲しいと思っています。それは専門家養成ということに限らず、日本の高等教育の中と言いますか、特に日本の置かれている立場ということから言いますと、日本は島国なので、海外との経済・社会・文化など色々なところにおいて交流はなくてはならないと考えます。専門家でなくても海外を経験するということが人生の中で必要だと思うのです。そんな中で、さっきも言いましたけども、若い人たちが、海外を特に学業として経験するといった時に、その金銭的な問題等も含めて、また、その時間的なものも含めて、できるだけ負担無く、上手く経験できるようなシステムを考えていく必要があります。もちろん文科省でも奨学金の制度とか、今言ったようなGPによる特別な負担制度というのを考えていますけれども、大学の方でもぜひ考えて欲しいなってい

うのはあります。

さっき発展系のことを言いましたけれども、研究者と現場というのが出てきています。これは、教育という分野だけではなくて、様々な研究分野でもそうなんですけど、途上国の大学の先生方、研究者が直接現場に出て行くということはあまりない、現場に出たがらない、現場は現場の人間でやって、大学の研究者はそういう具体的な現場の活動というのとは別であるという意識を持っている途上国の研究者はかなりたくさんいると聞いているんです。そういうところはですね、日本の研究の特色として、今馬場先生が教育で実施していますけど、現場主義といいますか実学的なもの、工学とか農学とかもそうなんですけど、研究者が現場に出て行くということは、ひとつの日本の特色ではないかと思っているのです。その中から色々な新しいことも出てきますし、そういうことがあると、先ほど JICA の方も言うておりましたけれども、日本の研究者が、途上国の大学と現場を繋ぐというのは非常に役割的には適しているのかなと思います。欧米の研究者よりもその辺は、日本の研究者の方が適していると思いますし、農学の分野でもこれはアフリカではなくアジアですが、大学との共同研究ということが今はかなり進んで来ています。そういう共同研究の中であって、途上国の研究者を如何に現場に連れて行くかということが、今ひとつ大きな課題と言われているところもあります。その辺は教育の分野でも同じだと思いますし、現場を通じた研究というのは、今後日本のひとつの国際協力、特に大学の共同研究なんかも含めて、大きな特色になっていくんじゃないかと考えています。

司会 (馬場)

突然のご指名にも関わらず、どうも有り難う御座いました。武下副局長様いかがでしょうか。一言二言ご意見を承りたいと思いますが。

参加者 (武下)

武下ですけれども、先ほど説明していただいた、澁谷さんの一番最後の方のスライドに、私の成果は研究面ではこれこれです、それから言葉は忘れてしまいましたが、最初にお話がありました人間力とかですね、そこは研究とは違う部分ですけども、加えて、通常隊員たちに求められているのは、現場がどう変わったか、どう変えたのか、変わる原動力に成り得たのかという部分だと思うんですね。その部分を確保しないと ODA の一部としてやって意味が若干薄れてくるので、今後はそこをどう確保していくかということ、その 3 つを達成するというのはますます負担がかかってくると思うんですけど、重要だと思います。行かれています方々、スライドには始まってから 0 名がいたり、1 名がいたり、4 名がいたりという、不確定な要素があるということでしたけれども、そこをある程度確保して、行った方々が、ひとつのプロジェクトの構成員として、お互い 2 回目の隊員の方がいらっしゃったり、高校等の教員経験があったり、色々な方々がいらっしゃるので、お互いにどれだけ手を結ぶかによって、今までの経験を共有できるかに繋がると思います。そして将

来的に現地の先生が、教える相手ではなくて、一緒にどうやって研究していくかということが入ってきて、修士論文という成果が、大学院の学生としては、成果物として出てくると思うんですけど、それをやはり現地の人たちと共有することによって、それがザンビアに残るひとつになって、さらに教育省にとっては、そういう研究論文、課題解決のひとつのプロセスであったり提言だったりするわけです。じゃあこの地区でなくて北部でもやろうとか広がりが出てくる方向に広がっていくと思います。やはり広大のご活躍、または効果を高めるために、どうして行くかというのが、ひとつの大きな目玉として入ってこない、他のプログラムとどう違うのっていうことだったり、個人の研究者もしくは隊員とどこが違うのっていうところになるんじゃないかっていう印象を受けました。まあいずれにしても、行かれた方、今日は研修生の方々でも選りすぐりの方がこちらに来られたと思いますけども、一定の成果を得て、途中で帰った人はいないというようなご報告もありましたので、非常にそうかと思いました。じゃあこれを更に進めるためにはどうしていくか。実は協定書を結んでいるのは、国際協力研究科と青年海外協力隊事務局で大学と JICA が結んだわけではないんですよ。今日は、別の部署（人間開発部）からも菅原が来ていますが、これは All JICA として、もしくは、先ほどお話しがありましたように広島大学としてももう少し違った形にするかな、っていうこともひとつ課題かなっていうふうに思いました。

司会（馬場）

シンポジストの方に御願ひする前に、立ち上げに苦労された、すいません一言だけ御願ひしたいんですけども。実は私たち現在関わっているのも、もうすでに 2 代目以降に入っているのですが、本当の最初の立ち上げに苦労して下さった、駒沢元 JICA 中国国際センター所長、どうぞよろしく御願ひします。

参加者（元 JICA）

すいません。突然指名されたんで、考えていなかったんですけど。私は JICA の OV として、退職して 6 年経っております。ただ、このプログラムのアイディアと言って良いと思いますけど、たまたま広島のセンターに勤務してたものですから、当時の IDEC の中山先生（元研究科長、本ザンビア・プログラムを立ち上げの中心的功労者）とこのアイデアをどう進めていくかということ、特に先生のご苦労を横で見っていた一人です。少なくとも私からすれば 8 年ですか、隊員派遣で 8 年で、ここまで来ていることを私も感じていますし、皆さんのご苦労がいかに大変だったかということも思います。一点だけですね、今、協力隊事務局の武下副局長もおっしゃいましたけど、まあ JICA の OV ですから現役じゃないですから、OV として JICA に注文したいのは、官民にこだわる必要は無いのかもしれないですけど、参加者ですね、あるいは参加したい人のキャリアアップのために JICA が何ができるかってことをぜひもっと議論してもらいたい。そして、JICA の職員になったり外務省の

職員になったりする協力隊の経験者は多いですけども、このプログラムは挑戦的なプログラムだと私は思いますので、この挑戦をぜひ引き継ぐ、あるいはもっと大きく育てていくために JICA は何ができるかっていうことを今後とも引き続き検討していただきたいと思います。ちょっと JICA に注文させていただいて、私の感想とさせていただきます。

司会 (馬場)

ありがとうございました。司会の不手際で十分な議論が尽くせなかった部分もありますが、最後にシンポジストの方々に 1, 2 分でまとめていただきたいと思います。すべてお答えできない場合は仕方がないと思いますので、重要なところだけでもかいつまんで、お話いただければと思います。そうしたら逆に久保田先生の方から御願います。

久保田

フロアの方々から色々なお話を聞いて、色々と参考になったんですが、やはり今後、こういうプログラムをどんどん進めていくためには、文科省とか JICA とか関係機関と連携していく必要があるなと凄く今日感じました。特に JICA の場合は 8 年間、このプログラムも 8 年もお互い協力しながらやっているというのは、素晴らしいと思うんですね。文科省も色々と支援をしてくれるんですけど、GP は 3 年しかないんで、その後の支援がどうなるかなってというのが、私も心配なんです。そういう意味でひとつの外部機関だけじゃなくて、色んなところとより良いネットワークをつなげながら、お互いに良いところを出し合うような関係作りが必要なのかなと思います。特に JICA と広島大学の関係というのは、センターがあって、JICA の出向の方とかが一杯来ていたわけですね。そういう中で、話が持ち上がったのかなと思うので、そういった関係作りが重要なのかなって思います。先ほど短期ボランティアの話がありましたけれども、もう少し柔軟な枠で短期ボランティアのようなことを考えることができれば、大学としても乗りやすいと思うんですね。JICA というのは、どうしても技術援助ということが前面に出ますから、そこから外れてしまうとどうしても蹴られてしまうんですね。例えば我々がやっているプロジェクトなんかは、シリアにももちろん学生は行くんですけど、それと一緒に校長先生が行ったり、現場の先生とかが行くんですよ。向こうでワークショップをやると、その時に日本の小学校とシリアの学校とをテレビ会議で結んで、その日本に帰ってきた先生が、日本の子どもたちに向かって、今シリアにいますっていう話で交流を始めて、その後、絵本を描いたり、絵を描いたりというプログラムを含めてやるんですね。そうすると、単に援助とか技術協力とかだけではなくて、交流とかそういうところまで含んだ、関係性ができあがってくるわけですね。そういうところをもう少し外側から支援があるともう少しやりやすいなという感じがしますね。

もうひとつは、先ほどテレビ会議システムが利用できないかという話を誰かしましたけど、私の学部は情報科学部という学部なもんですから、そういう情報機器をどのように使

うかということで、日常的にテレビ会議とかですね、インターネットとかを使って向こうの人たちと交流をしているわけですね。特に学生の行くときは、向こうで e ポートフォリオを書かせまして、日常的にその活動をチェックしながら、私が行けないときは、日本からアドバイスをするとか、そういう形で動いているので、今後そういういわゆる情報機器ですね、テレビ会議ですとか、この間もミャンマーに行った時にあのスカイプというテレビ会議システムを使えるか試してみたんですけど、結構、線が細い割りには使えるんですね。まあ、そういう意味でそういったものをどんどん利用しながら、活動していくのはいいんじゃないのかなと思います。

清水

私は、ある程度予想はしていたことなんですけれども、実践と研究、または実践と理論をどうむすびつけるか、どうむすびつけていくのかというのは、皆さんの関心事でもありますし、今後、学生の指導、または自分自身の研究の上で、これはひとつ追求していくテーマだろうなということは強く認識しました。同時に UNZA に限らず、ザンビア全体における研究活動を本当にどう結びつけるか、先ほど、文科省の浅井さんの話にもありましたように、現地の先生をどうやって現場と向き合わせるのか、このふたつが非常に大きなテーマだと思います。そのことを認識しつつ、今後ザンプロを発展させていきたいと思いません。

菅原

今日はこのような機会を頂いて、本当に有り難う御座いました。むしろフロアの皆様からのご意見で、私の方が勉強させていただくことが多かった気がします。先ほどもでましたけど、研究と実践の連携をどうやっていくかということは、このプログラムを見れば、そうかと思うんですけど、海外協力を実践していく場では、その現場での活動がどれだけその国の政策なり、その国の将来にインパクトを与えていけるのかという所を常に考えています。ですので、大学に期待したいところは、特に研究成果の蓄積、体系化、それを国際的な場、その国の中だけに限らず、SMASSE WECSA というようなアフリカ地域で理数科教育を改善していこうというネットワークがありますけれども、そういった場でも発信していくことが必要だと思います。その時にやっぱり、個々の教育現場の限られた研究だけでは、説得力がないので、これから例えば 10 年のこのプログラムの成果を蓄積して、ひとつのまとまった研究のようなものとして成果が出せれば、政策的にも、地域のレベルでも、アピール度は高くなりますし、実際に政策実施者の方々が見て、なるほどというふうに、言って貰えるような、アピールができるんじゃないかと思います。ここは、JICA の非常に弱いところですので、研究機能を持つ大学との連携という意味では、進むべき方向としてあるのかなというふうに思います。

それから、現場活動レベルでの連携というのも、これまでも何度もいろんな国で実践を

してきましたけれども、なかなか、上手くいかないというところがあります。そこはひとつは、皆さんからもコメントがありましたけれども、隊員の自主性をどう確保するかということと、プロジェクト活動の目的とどう両立させていくのかということ、ここがいつも難しく、頭を悩ませているところです。JICAとしてこのプログラムをどう育てていけるのか、検討しなさいと言うことを先輩からも宿題を頂きましたので、これを含めて今後の課題として、協力隊事務局としての立場ではないんですが、プロジェクトの立場として考えていきたいなと思います。今日は有り難うございました。

木根

今、菅原さんの方からもありましたけど、私自身も色々な方の意見を聞かせてもらって、考えさせられることが多いなと思いました。このザンビア・プログラムに関して、私としては、やはり参加した一学生であり、一隊員であるということから、協力隊員としてのザンビア・プログラム、国際協力分野をめざそうとする学生にとってのザンビア・プログラムということを考えて時に、やっぱり国際協力分野で仕事をするためにマスターを取る必要があると、それが最低ラインであるという話も良くされますし、同時に海外の経験を持っていた方が良いという話があると、ザンビア・プログラムの学生とか、協力隊員の魅力というのは、それがいっぺんにできることかなと思います。そのプログラムの中で、どういう能力を育成するのか、その後、どういう進路を決めていくのかということところは、ザンビア・プログラムに参加する学生・隊員の経験も全然違いますし、協力隊として派遣される場所によっても全然違って来るし、それに応じて研究の中身も変わってくる。こうすればこういう成果が出るというのは、なかなか言えない現状にあるのかなと思います。ただ、今後考えていく上で色んな検討材料はすごく出てきているというのか、事例みたいなものがどんどん集まってきているということを考えて時に、国際協力を目指す学生、隊員にとっての魅力というのはまだまだあるんじゃないのかなと思います。内容をどう発展させていくかということは、自分も修了生として考えていきたいなと思います。今日はどうも有り難う御座いました。

司会 (馬場)

今日は日曜日の午後にも関わらず、これだけ多くの方にご参加頂きまして、最後まで熱心に議論にご参加頂きまして、どうも有り難う御座いました。まずは、シンポジストの方々に拍手を頂けますでしょうか。

研究科長の方から一言お礼を述べさせていただきたいと思います。

池田

本日は、本当に日曜日にも関わらず、こうやって熱心にご参加いただきまして、有り難う御座いました。私の方も色々な議論が出て参りまして、この立ち上がった頃からのこと

を考えますと、忸怩たる思いも御座います。しかも、大学というのは妙なところございまして、現場の実践に役立たない、理論的なペーパーはあり得るんですね。ところが、これは池田の私見では御座いますが、現場の実践に役立たない研究は私どものところには要らない、それは空理空論やっただけであればいい、我々は現場の中で一体どういうことが起こっているのか、それを解決するためにはどうすればいいのかということを実践的に解決していく、もっと泥臭く言えば、私は実践の範疇に入れたいと思うんですね。結果的にそれが、形として研究になれば、それがいわば研究だろうと、こういういつも極端なことを言って後で叱られるんですけど、私はそういう国際的な場において、そういうふうな信念を持っております。そしてそれでなければ国際協力は成り立たないというふうに今までやってきましたし、たぶんこれは私が最初にアフリカの地を踏んだときに、ケニアでその当時リーダーをやっていた杉山さんが、本当に熱心に言ったことなんですね。私が彼から学んだことはそこなんですね。現場で本当に汗を流してそれを研究にしていこうと、我々に課されていることだろうし、ただし残念なことに、それでは本当に研究という形になっていないのも事実だろうと思います。ですから、一日も早くそのような学問領域を作りたいというのが私の願いでございます。あと私は定年まで 5 年しかございせんけれども、早く定年以前にやめて、どこかのプロジェクトで気長にやってみたいなあという夢がございます。その時はぜひご協力を御願いしたいと思います。どうも本日は有り難うございました。

シンポジウムを終えて

広島大学
馬場卓也

シンポジウムは盛況のうちに終わった。充実した心地よい疲労の中で、これまでの参加学生とザンビアプログラムの成長について考えた。ザンビアの学校は、余りにも異なる環境に育った日本人の若者を、時には混乱させたり落ち込ませたりもするけれども、確実に人としての成長を促してくれる。そして、彼らは意見を言ったり積極的に活動したりという形で、このプログラムの成長を支えてきた。個人とプログラムが相互に影響しあいながら育ちつつある姿こそが、今回のシンポジウムで明らかになったことである。日々の雑事に追われ時間を過ごしていくうちに、いつの間にか大きく成長した姿—潜在性—を、本日改めて確認することができた。

ここでは本報告書を終えるにあたり、シンポジウムで取り上げられた四つの論点について振り返り、次の段階へ向けた助走としたい。

まず、育てるべき能力についての議論があった。この点ではプログラム参加者の木根さんが「二度の青年海外協力隊の経験を比較して見ると、プログラムでは日本を相対化して見ることを教わった」と言ったことが印象的であった。また JICA の菅原調査役は、カウンターパートとの距離のとり方を国際協力専門家の資質として挙げていた。

これらは、実践と研究の関係という二番目の論点につながっていく。会場から「研究のための活動にならないか」という問題提起は、まさに我々が格闘してきたことであり、本学の清水准教授は、「問題解決」というキーワードによって、両者の関係性を説明した。現在、実践的研究領域において両者の結びつきの必要性が叫ばれており、本プログラムでは、教育活動という意味でも、協力活動という意味でも、実践をベースとした研究の在り方を探ってきた。

以上の視点は、見方を変えると、現地の社会、人そして問題との距離のとり方と言え、それはコミットの仕方とも言い換えることができる。同感的支援関係とでも言えばよいのだろうか。私たちは最終的な責任を取れる位置にはいないが、現地の国際教育協力の場において、このような距離の取り方は鍵となる。

三番目に、学生の能力形成や実践と理論の結びつきを可能にする、もしくは高める制度の問題である。教育も国際協力も極めて人間的な行為であり、定式化、自動化を簡単には図れない。関西大学の久保田教授からも、プログラムの要求する水準と一般的な学生の能力との間の齟齬について意見が出された。ここでは学生の能力を高めていく工夫と同時に、必要に応じて柔軟に対応することが可能となる制度が求められる。

現在のところ、ザンビア内にいる学生、帰国した先輩学生、指導教員がチームとして機能している点が、このような問題の部分的な解決に力を発揮している。ただし今後さらなる飛躍を求めるのであれば、ケースメソッドなどによる事前指導、テレビ会議などによる

中間指導の充実、そして短期ボランティアなど新しい取り組みをうまく組み合わせることを考えていく必要がある。

四番目に今後の課題として研究成果の普及と発信についての議論がある。前者は実践的、後者はより理論的な意味合いが強いが、基本的には相互に関連している。そのためには色々な機関や人（ザンビア教育省及び行政官、ザンビア大学及び研究者など）と関係を構築していく必要がある。また日本国内においても、大学、文部科学省、JICAなどの機関とのより緊密な連携、長期的ネットワークが求められる。

これらの特長を最大限に活用したり、問題点を克服したりすることで、国内初の先進的な教育プログラムに対する関係者の期待へ応えていきたい。

最後になったが、今回の参加者はもちろんのこと、これまで個々の学生を育てて頂いた方や、またプログラムの成長を温かく見守ってくれた方に謝意を述べたいと思う。

第三部
参考資料

ポスター
アンケート結果
派遣実績等のデータ
プログラム広報

国際協力の専門的人材育成を目指す先進的教育プログラム (通称:ザンビア・プログラム)の成果と課題

～「現場で実践」する大学院教育の経験と未来像～

主催：広島大学大学院国際協力研究科 (IDEC)
共催：広島大学、(独)国際協力機構 (JICA)、ザンビア共和国大使館
後援：文部科学省 (予定)

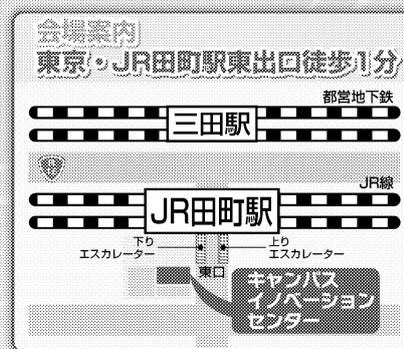
日時 12月13日(日) 13:30▶17:00 (受付13:00から)

場所 キャンパスイノベーションセンター東京 5階 入場無料

13:00	受付開始
13:30▶13:45	ご挨拶 (ザンビア教育省事務次官、文部科学省、JICA)
13:45▶14:00	ザンビア・プログラム概要説明
14:00▶15:00	成果報告 (算数、理科、プログラム成果)
15:00▶15:20	休憩
15:20▶17:00	シンポジウム

※プログラム終了後、進路相談会を開催します

大学と国際援助機関との連携により、青年海外協力隊ザンビア理数科教師として派遣された学生が、協力隊活動と同時に実践的修士論文研究を行うプログラム。こういった国際協力分野での専門的人材育成事例に今後求められるあり方、将来展望は何か。先駆者としての蓄積も紹介しながら、未来像を描きます。



使用言語：日本語

事前登録：ザンビア・プログラム HP から、または下記センターへお申込ください
プログラム HP <http://home.hiroshima-u.ac.jp/zamproba/>



国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター

〒739-8529 広島県東広島市鏡山 1-5-1 広島大学大学院国際協力研究科内
電話：082-424-6944 FAX：082-424-6904 メール：intlscim@hiroshima-u.ac.jp

報告会&シンポジウム アンケート結果（回答合計 33 人）

Q 1. 報告会&シンポジウム全体について

良かった 22 ふつう 9 物足りなかった 2

「良かった」コメント

- ・ もっと公に対して会の存在を広報してもいいのでは？
- ・ 成果と同様に失敗にも焦点があてられていたので面白く聴講できた。
- ・ 制度自体の「課題」についての話が多く、「まだ足りない、至らない」という話が多かったように思います。私自身は「どれだけステキなプログラムなんだろう」と興味を持ってきたのですが、逆に普段なかなか聞けない課題について知ることができとても参考になりました。
- ・ 特に、ザンビア側関係者を呼ばれたのは素晴らしいと思います。
- ・ 様々な立場の人が発表、シンポジスト、挨拶をされていて、この企画を行うことに情熱を感じました。
- ・ 話し合いが進むにつれて、このプログラムの課題が明らかになった。
- ・ 進路について悩んでいるので、多くの発言の中から、ヒント・刺激を得られた。
- ・ シンポジウムでも聴講者側から意見が言える配慮があってよかった。

「ふつう」コメント

- ・ シンポジウムは論点をもう少し絞った方がいいと思いました。

「物足りなかった」コメント

- ・ テーマが明確ではなかった。まとまりがなかった。特に前半の発表。

Q 2. テーマ及び内容について

良かった 21 ふつう 8 物足りなかった 2 無回答 2

「良かった」コメント

- ・ 大学院生がもっと参加できればよいとは思いますが、その前に国際協力に携わる教員がもっと参加できるとよいと思います。
- ・ シンポジウムがあったのが、すごく良かった。実際の自分の活動を研究としているスタンスが表れていて良いと思います。テーマ、内容はよかったですが、より深く聞きたいと思いました。

「ふつう」コメント

- ・ テーマは良いが中身が共合っていない

「物足りなかった」コメント

- ・ やはり、課題が飛びかかっている、まとめるのが難しかったのでは
- ・ JOCV の活動成果だけでなくプログラムの成果をもう少し掘り下げて言及して欲しかった。

Q 3. 会場について

満足 17 ふつう 15 不満 1

Q 4. 曜日について

日曜日 21 他の曜日 8 何曜でも可 4

Q 5. 時間について

今回の時間帯 28 別の時間帯 2 無回答 3

Q 6. セミナー情報入手方法

メルマガ・ML 6 ポスター・ちらし 5 プログラム HP 4
Web 掲示板等 1 無回答 1 その他 16

Q 7. 実施方法についてのご意見

- ・ JICA 関係者が多く集まっているが、知らない人々も多いし、皆さん情報を持っていると思うので、かるやかな休憩時間を持ち、コミュニケーションの時間があればよい。
- ・ もっとこのセミナーの広報を大きく広めて、学生などの参加者も増やしていくと大学側にも良いのではないか。
- ・ 前半の報告の時間が限られていたため、具体的な事例や、それがどのようにザンビアの人々に役立ったのか、プログラム参加者が何を得たのかが、漠然としていた。より具体的な話も盛り込んで頂けるとより興味深いものになると思いました。

- ・ JOCV と大学院の連携の先駆けである貴学の取り組みを他大学の国際協力講座を持つところに情報提供して頂き、参加に係る呼びかけ(短期 JV, SV)を積極的にしていただければと思います。
- ・ もう少し休憩の時間がほしかったです。
- ・ 細かいところですが、参加受付のメールに今回の報告会&シンポジウムの URL を貼っておく御心遣いがあれば嬉しいです。
- ・ 上記のセミナーでの宣伝以外にも、もっと若い人が参加できるように、宣伝をしていなかったのであれば、もっと広報(大学、大学院)すべきだと思いました。
- ・ テーマを絞り、それに沿って発表者は準備し、最後に討論するようになればいいと思います。ザンビアの教育、今日のプログラム、協力隊事業など、テーマが散ってしまった。
- ・ 質問に答えるのが、馬場先生がメインとなっていたのが少し残念です。答えられるのが馬場先生ぐらいなので仕方ないと思いますが。
- ・ ①JOVCV は成果が問われない。修士論文レベルまで要求しないにしろ、課題や問題解決、改善などをまとめたものを経験知の蓄積として JOCV 隊員にも貸してもよいのではないかと感じた。
- ・ ②JICA 研究所には、現在本プログラムについて研究実績はあるのでしょうか?(本プログラムについての分析有効性など JICA で行っているのか?)

Q 8. 今後とりあげたらよいと思われるテーマ

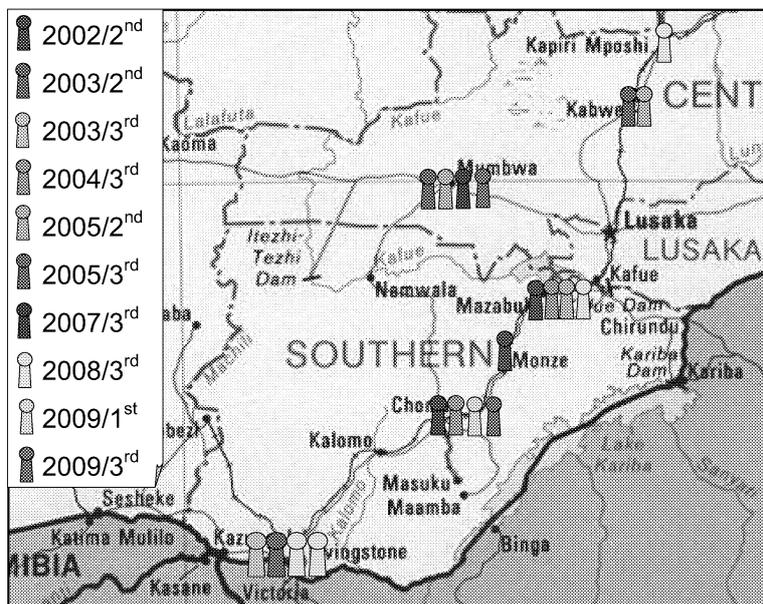
- ・ ザンビアプログラムの卒業生が、プログラムの経験を現在どのように生かしているのか
- ・ スポーツを装置として世界をつなげること。
- ・ 連携プログラムの成果がザンビアの教育を変化させたのか(影響を与えたのか)
- ・ 算数・理科以外のテーマで卒論(教育関係)を書いているザンプロ派遣の人の成果報告も知りたかった。
- ・ 金融危機など社会の中のこのプログラムの位置づけ
- ・ 協力隊隊員と、JICA 専門家との違い(壁)について「カウンターパートとの距離の取り方」が難しい。前者は自分が活動することが中心、後者は、自分はサポート、アドバイス、指導役でカウンターパートにノウハウを残していくことが重要・・・という話がありました。「魚を与えるのではなく、その獲り方をあたえる」ということだと思いますが、それを協力隊隊員に求めることは難しいでしょうか?木根さんが最初の任地で支援が点で終わってしまっただけに繋がらなかった・・・ということをおっしゃっていましたが、多くの隊員がそういう思いを抱えているのではないのでしょうか。せつかくの全力の 2 年間で、現地の将来につながらないのはとてももったいないと思います。
- ・ 他の援助ボランティア機関(例:国連ボランティア、平和部隊など)における教育プログラムとの相違点などが知りたいと思います。
- ・ 大学生とプログラムに参加した方との懇談会などがあればよいと思います。
- ・ 成果報告を、もっと詳しく聞きたいです。
- ・ 研究者への支援の見直しと、どのような研究者が求められているのか、また、研究者は何を求められているのかを理解して派遣されているか。

Q 9. 自由記述

- ・ 修論の内容を簡単にでも紹介して頂けるとさらによいかと思います。
- ・ 11 月にザンビアに派遣中の JOCV の方にお会いしました。ユネスコの課題に「アフリカの教育」があるので、日本だけでなく、ユネスコにもアピールして下さい。
- ・ シンポジウムの質問は、一問一答でやった方がわかりやすかったのではなからうか?
- ・ 広報の手段として国際開発学会へお知らせすることも有意義だと思われる。
- ・ 配属先での研究発表(研究内容にもよる)→SPRINT の活用(特に、中央州では郡レベルでも実施可能)→教官にも結果報告
- ・ 8,9 年生を担当する教員の向上を測るのであれば、UNZA プラス教員養成校との連携も有効
- ・ お疲れ様でした。研究と実務の間にいる者として、どう連携するのかという点で勉強になりました。
- ・ 本日はありがとうございました。
- ・ 隊員活動が隊員のためにあるように聞こえる部分があった。現地人のため、という視点が薄いように感じた。
- ・ 協力隊を実施する JICA の方でそういったサポートに力を入れるとよいのではないのでしょうか?大学のプログラムで継続的に行えば、個人で協力隊に参加するよりも体験の共有・フィードバックはしやすい

と思います。ザンビアプログラムで、まず「獲り方を教える支援の実践」を確立し、それを JICA にフィードバックするなど、協力隊がより現地の将来に継続的な恩恵を残していけるようなシステムが構築できるとよいと思います。

- ・ 子供の隊員活動の様子の一部がわかりました。
- ・ 子供がどんな活動をしているのか知りたくて参加しました。成果や問題点などを聞くことができよかったです。素人ですが、色々勉強になりました。今後どういうことが進んでいくのかが興味あります。



ザンビア地図（原図）出典：テキサス大学図書館

図1 派遣派遣ごとの実績

表1 年度ごとの派遣人数

年度	人数
2002 (14) 年度	3
2003 (15) 年度	3
2004 (16) 年度	2
2005 (17) 年度	4
2006 (18) 年度	0
2007 (19) 年度	1
2008 (20) 年度	4
2009 (21) 年度	3
合計	20

表2 修了、帰国、活動中の人数

修了	12 (全員任期満了)
帰国 (任期満了)	1 (修論執筆中)
活動中	7

(2010年2月現在)

表3 修了後の就職先（重複あり）

職種	人数（12人中）
小・中・高等学校教員	5
研究など（教育分野）	4
国際協力関連（教育分野）	3
その他（民間企業）	2

表4 プログラム修士論文一覧

ザンビアにおける Zone Education Support Team の現状と可能性
国際教育協力としての教員センターに関する研究—ザンビア共和国南部州の事例からの検討—
理科教育開発における授業研究の意義と役割—生徒中心を目指すザンビアの基礎教育を事例として—
ザンビア基礎学校における数学的活動に基づく授業展開の現状と可能性
ザンビア共和国における HIV/AIDS に関する情報量の多寡が予防行動に及ぼす影響
ザンビア基礎教育の図形学習における困難性に関する研究
ザンビア後期基礎教育における生徒のおかれている文化的状況についての研究
ザンビア後期基礎教育における分数理解に向けた授業実験
ザンビアにおける『本質的学習環境 (SLE)』に基づく数学科授業開発研究
ザンビア後期基礎教育における数学科授業分析の研究—教師・生徒の言語活動を中心に—
ザンビア共和国の基礎教育における効果的な学校経営
ザンビアにおける基礎算数能力の獲得過程に関する研究
数学の言語的表現にみるザンビアの小学生におけるかけ算・わり算概念に関する研究
ザンビア後期基礎教育における数学と文化をつなげる教材開発研究～図形領域に焦点をあてて～
ザンビア後期基礎教育における数量関係の理解に関する研究
The present situations in science education in basic school of Zambia
ザンビア基礎学校における学校経営の改善
ザンビア中等教育における理科と数学の関連性に注目した授業開発研究
ザンビア基礎学校における数学の効果的発問に関する研究
ザンビア数学文章題における思考過程の研究

執筆中含む

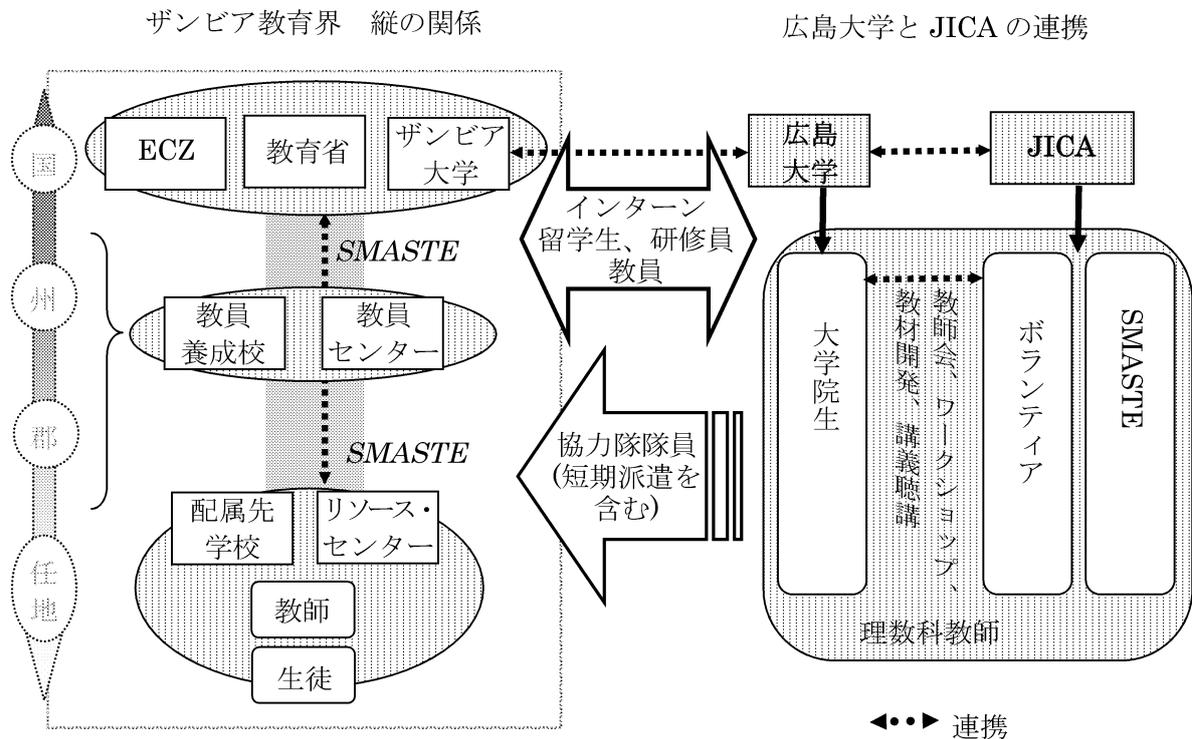


図 4 ザンビアにおける関係者間の連携関係

冊子資料

- 「ザンビア国理数科教育分野における広島大学大学院と青年海外協力隊との連携プログラムに関する調査報告書」国際協力事業団 青年海外協力隊事務局 平成 13 年 3 月
- 「国際開発関係大学院と国際援助機関との連携による特別プログラム制度開発に関する研究」（研究代表：中山修一、平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）課題番号 13490018）研究成果報告書 平成 15 年 3 月
- “ザンビアの教育 第一版(ドラフト)”，教育関連叢書 No.1, 広島大学国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター, 2007 年 3 月
- “The Journal of Research and Practice of International Cooperation in Science, Mathematics and Technology Education”, Volume 1, Number 1, SMATEC, (March 2009), (『国際理数科技術教育協力実践・研究誌』 広島大学国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター 2009 年 3 月)

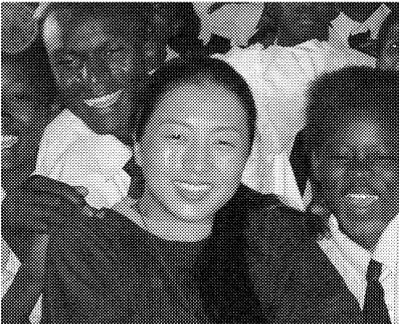
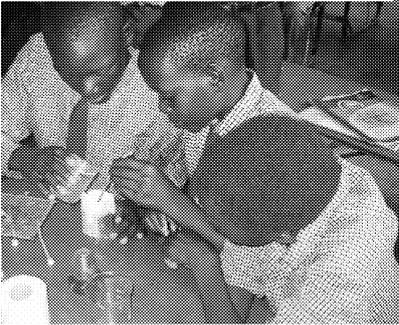
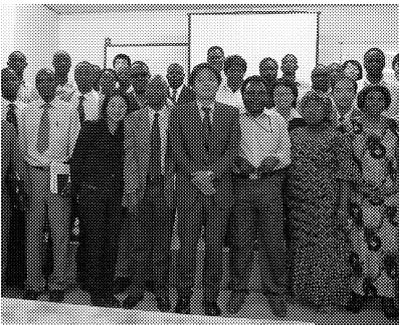
「国際協力」を 学びながら 実践する!

広島大学 大学院国際協力研究科 教育文化専攻

JICA 連携特別教育プログラム

学生募集中!

青年海外協力隊・理数科教師としてアフリカ・ザンビア共和国へ赴き、学校などの配属先でボランティア活動に携わりながら、同時に教育開発に関する研究を行います。理論と実践の両面から国際協力を学びスキルアップする全く新しいタイプの大学院カリキュラムです。



JICA 連携特別教育プログラム

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/zamproba/>

広島大学大学院国際協力研究科 (IDEC)

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/idec/>

独立行政法人国際協力機構(JICA)青年海外協力隊(JOCV)との連携による、ザンビア理数科教師派遣特別教育プログラム

広島大学大学院国際協力研究科(IDEC)は、「発展途上国の諸課題の解決に取り組むことができる高度専門職業人の育成」という目的の一環として、広島大学とJICAによる連携協定のもと特別教育プログラムを実施しています。教育文化専攻博士課程前期に在学中の2年間、JOCVとしての活動を行いながら、その間も本研究科教員の指導を受け、現場での実践を通じて国際協力に関わる人材としての資質・能力を高めることをめざしています。

1. 内容と特色

- (1) JOCV隊員としてザンビア共和国に赴き、現地の学校や教育センターでの授業実践・教材開発などを通じ、教育分野における国際協力、発展途上国支援のための活動を行います。(青年海外協力隊活動)
- (2) JOCV活動と並行して現地集中講義など本研究科教員の指導を受けます。帰国後、教育協力の理論と隊員活動で実践した成果を基に修士論文をまとめます。(調査研究活動)
- (3) JOCV参加期間を含め標準の課程として3年6か月で修士の学位が取得できます。

2. 教育期間

標準教育期間は3年6か月で、これにはJOCV所定の派遣前訓練と2年間の協力隊活動を含みます。単位取得については、JOCV参加期間に、インターンシップ(2単位)、フィールドワーク(2単位)、専門科目(4単位)、演習(4単位)の計12単位が取得可能で、残りの最低必要単位(18単位)は、JOCV参加前の1 Semesterと帰国後の1 Semesterで取得します。

3. 学生の身分

IDECの在学学生としてJOCVに参加します。現地でJOCV活動に従事しながら、同時に遠隔地在住学生として指導教員を中心に本研究科教員の指導を受け、指定された単位を取得することができます。

なお、本特別教育プログラムの対象学生は日本国籍を有し、教育文化専攻を希望する者に限ります。

4. JOCV活動の派遣先

ザンビア国内の初・中等学校もしくは教育リソースセンターを想定しています。JOCVの待遇及び活動の詳細については、JOCV募集要項等を参照してください。

5. 募集条件

- (1) 定員：博士課程前期の学生若干名
- (2) JOCV選考試験
本プログラムを希望する学生は、IDEC入学試験とは別にJOCV選考試験を受験し合格しなければなりません。なお、JOCVに不採用の場合は、IDEC一般学生と同様の扱いとなります。
- (3) 期待される受験生
 - ア. 国際協力活動と大学院進学の両方を志望する学部卒業生(教員免許を取得しているとなお望ましい)。
 - イ. 国内での経験を海外で活用しながら学位取得を目指す教員経験者。
 - ウ. 国際協力に関心があり、さらに知識・技術を高めて国際協力活動を行おうとする者。
 - エ. より効果的な国際協力を求めて、あるいはさらに国際教育協力について学ぼうとして、再度海外での活動を希望する国際協力実務経験者等。

6. お問い合わせ先

国際協力研究科学生支援室(入試担当)、または以下メールアドレスまでお願いします。皆様のお問い合わせをお待ちしております。

広島大学大学院国際協力研究科(IDEC)
〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1
電話:082-424-6910 学生支援室(入試担当)

お問い合わせ用メールアドレス
国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター
(※メールの件名にIDEC特別プログラムと明記ください)
intlscim@hiroshima-u.ac.jp

本冊子は、平成 21(2009)年 12 月 13 日(日)に東京都港区にあるキャンパス・イノベーションセンター東京で開催された、ザンビア・プログラム成果報告&シンポジウムの記録を目的として作成された。

「第一部成果報告会」には発表資料等、「第二部シンポジウム」には議論をなるべくそのままのかたちで書き起こしたもの、「第三部参考資料」には補足資料を掲載した。

本冊子に掲載されている意見は基本的に個人の立場で発表したものであり、必ずしもそれぞれが所属する組織の公式見解とみなされるものではありません。

発 行

広島大学大学院国際協力研究科 (IDEC)

国際理数科技術教育協力実践プロジェクト研究センター (SMATEC)

〒739-8529 広島県東広島市鏡山 1-5-1

TEL 082-424-6944 FAX 082-424-6904

e-mail intlscim@hiroshima-u.ac.jp

